

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄								備考	
計画の区分	学部の設置									
フリガナ	ガッコウホウジン メイジヨウガクイン									
設置者	学校法人 明浄学院									
フリガナ	オサカカンコウダク									
大学の名称	大阪観光大学 (Osaka University of Tourism)									
大学本部の位置	大阪府泉南郡熊取町大久保南5丁目3番1号									
大学の目的	建学の精神 (『明(あか)く、浄(きよ)く、直(なお)く』の精神に則り、豊かな心と深い教養を備え、知性に輝く有為の人材の育成) 及び教育基本法に則り学校教育法の定める大学として広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的・道徳的及び応用的能力を展開させ、国際社会に貢献する有為な人材を養成することを目的とする。									
新設学部等の目的	国際交流学部は、日本学に関する諸分野の教育・研究と発信ツールとしての高度な英語力の涵養を基礎に置き、地球益を重んじる課題解決能力を備えた有為の人間「和魂地球人」を育成し、併せて文化の固有性と普遍性をめぐる研究の推進により交流学理論の構築を行うことを目的とする。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地		
	国際交流学部 [Faculty of Cross-Cultural Studies]	年	人	3年次 5人	250人	学士(文学)	平成25年4月 第1年次 平成27年4月 第3年次	大阪府 泉南郡 熊取町 大久保南 5丁目 3番1号		
	国際交流学科 [Department of Cross-Cultural Studies]	4	60	3年次 5	250					
計		60	3年次 5	250						
同一設置者内における 変更状況(定員の移行、 名称の変更等)	大阪観光大学 観光学部 観光学科[定員減] (△60) (3年次編入学定員) (△5)									
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位				
		講義	演習	実習	計					
	国際交流学部 国際交流学科	72科目	77科目	3科目	152科目	124単位				

学部等の名称	専任教員等						兼任 教員	
	教授	准教授	講師	助教	計	助手		
新設分	国際交流学部 国際交流学科	人 5 (3)	人 3 (2)	人 3 (2)	人 0 (0)	人 11 (7)	人 0 (0)	人 37 (14)
	計	5 (3)	3 (2)	3 (2)	0 (0)	11 (7)	0 (0)	37 (14)
既設分	観光学部 観光学科	17 (17)	4 (4)	5 (5)	0 (0)	26 (26)	0 (0)	29 (29)
	計	17 (17)	4 (4)	5 (5)	0 (0)	26 (26)	0 (0)	29 (29)
合計		22 (20)	7 (6)	8 (7)	0 (0)	37 (33)	0 (0)	66 (43)
教員以外の職員の概要	職種		専任		兼任		計	
	事務職員		20 (20)		3 (3)		23 (23)	
	技術職員		0 (0)		0 (0)		0 (0)	
	図書館専門職員		1 (1)		2 (2)		3 (3)	
	その他の職員		0 (0)		0 (0)		0 (0)	
	合計		21 (21)		5 (5)		26 (26)	
校地等	区分	専用	共用		共用する他の 学校等の専用		計	
	校舎敷地	20,037.00m ²	0 m ²		0 m ²		20,037.00m ²	
	運動場用地	17,717.00m ²	0 m ²		0 m ²		17,717.00m ²	
	小計	37,754.00m ²	0 m ²		0 m ²		37,754.00m ²	
	その他	7,665.17 m ²	0 m ²		0 m ²		7,665.17 m ²	
合計	45,419.17 m ²	0 m ²		0 m ²		45,419.17 m ²		
校舎	専用	共用		共用する他の 学校等の専用		計		
	16493.42 m ² (16493.42 m ²)	0 m ² (0 m ²)		0 m ² (0 m ²)		16493.42 m ² (16493.42 m ²)		
教室等	講義室	演習室	実験実習室		情報処理学習施設		語学学習施設	
	18室	11室	1室		2室 (補助職員2人)		5室 (補助職員1人)	
専任教員研究室	新設学部等の名称			室数				
	国際交流学部 国際交流学科			11室				
								申請学部全体

図書・設備	新設学部等の名称	図書 [うち外国書] 冊	学術雑誌 [うち外国書] 種	電子ジャーナル [うち外国書]	視聴覚 資料 点	機械・ 器具 点	標本 点	大学全体での共用分 図書 77,908 冊 [12,191 冊] 学術雑誌 8,930 冊[18 冊]	
	国際交流学部	1,595[62] (1,595[62])	18[6] (18[6])	0[0] (0[0])	0 (0)	585 (585)	0 (0)		
	計	1,595[62] (1,595[62])	18[6] (18[6])	0[0] (0[0])	0 (0)	585 (585)	0 (0)		
図書館		面積 1,884.26 m ²		閲覧座席数 166 席	収容可能冊数 110,000 冊			大学全体	
体育館		面積 1,229.10 m ²		体育館以外のスポーツ施設の概要 野球場 1 面		テニスコート 2 面			
経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区分	開設前年度	第 1 年次	第 2 年次	第 3 年次	第 4 年次	第 5 年次	第 6 年次
		教員 1 人当り研究費		400 千円	400 千円	400 千円	400 千円	—	—
		共同研究費等		500 千円	500 千円	500 千円	500 千円	—	—
		図書購入費	4,001 千円	0 千円	0 千円	0 千円	0 千円	—	—
	設備購入費	44,466 千円	0 千円	0 千円	0 千円	0 千円	—	—	
	経費の見積り及び維持方法の概要	第 1 年次			第 2 年次	第 3 年次	第 4 年次	第 5 年次	第 6 年次
学生 1 人当り納付金		1,330 千円	1,030 千円	1,030 千円	1,030 千円	—	—		
学納金以外の維持方法の概要				雑収入等					
既設大学等の状況	大学の名称	大阪観光大学							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設時期	所在地
	観光学部	年	人	年次人	人	学士(観光学)	0.66	平成 12 年度	大阪府泉南郡熊取町大久保南 5 丁目 3 番 1 号
附属施設の概要		名称：大阪観光大学観光学研究所 目的：観光学に関する研究 所在地：大阪府泉南郡熊取町大久保南 5 丁目 3 番 1 号 設置年月日：平成 13 年 11 月 規模等：第 3 教室棟 4 階の 1 室 33 m ²							

教 育 課 程 等 の 概 要

(国際交流学部 国際交流学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当 年次	単 位 数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
基 幹 教 育 科 目	日 本 学 プ ロ グ ラ ム 基 礎 教 養	日本学基礎教養 I A (人文地理)	1 前		2		○			1						兼 1	注
		日本学基礎教養 I α (地理基礎)	1 前		2		○									兼 1	注
		日本学基礎教養 I B (歴史)	1 後		2		○					1				兼 1	注
		日本学基礎教養 I β (歴史基礎)	1 後		2		○					1				兼 1	注
		日本学基礎教養 I C (習俗文化)	1 前		2		○									兼 1	
		日本学基礎教養 I D (政治)	1 後		2		○			1						兼 1	
		日本学基礎教養 I E (社会)	1・2 後		2		○									兼 1	
		日本学基礎教養 I F (自然)	1・2 前		2		○									兼 1	
		日本学基礎教養 II A (近代史)	2 前	2			○					1				兼 1	
		日本学基礎教養 II B (文学)	2 後		2		○									兼 1	
		日本学基礎教養 II C (芸術)	2 前		2		○									兼 1	
		日本学基礎教養 II D (経済)	2 後		2		○				1					兼 1	
		日本人の心性 I	2 前		2		○									兼 1	
		日本人の心性 II	2 後		2		○									兼 1	
		日本人の心性 III	2 後		2		○									兼 1	
		日本文明論	1 前		2		○				1					兼 1	
		日本神話論	1 後		2		○									兼 1	
		憲法	1 後		2		○									兼 1	
		基礎演習 I A	1 前	1					○		1	1	1				
		基礎演習 I B	1 後	1					○		1	1	1				
		基礎演習 II A	2 前	1					○		1	1	1				
		基礎演習 II B	2 後	1					○		1	1	1				
小計 22 科目		—	6	34	0	—			4	1	1	0	0	兼 9	—		
日 本 語 強 化 プ ロ グ ラ ム	日 本 語 演 習	日本語演習 I A (読解と要約)	1 前		1		○					1			兼 2	注	
		日本語演習 I α (日本語)	1 前		1		○								兼 1	注	
		日本語演習 I B (語彙・漢字)	1 前		1		○					1			兼 2	注	
		日本語演習 I β (日本語)	1 前		1		○								兼 1	注	
		日本語演習 I C (プレゼンテーション)	1 後	1			○					1			兼 2		
		日本語演習 I D (表現・敬語)	1 後	1			○					1			兼 2		
		日本語演習 II A (ディスカッション)	2 前	1			○					1			兼 1		
		日本語演習 II B (文章表現法)	2 前	1			○					1			兼 1		
		日本語演習 II C (ディベート)	2 後	1			○					1			兼 1		
		日本語演習 II D (文章表現法)	2 後	1			○					1			兼 1		
		日本語研究 A (格言・ことわざ・故事成語)	3 前		2		○						1				
		日本語研究 B (文藝)	3 後		2		○						1				
小計 12 科目		—	6	8	0	—			0	0	1	0	0	兼 2	—		
英 語 プ ロ グ ラ ム	留 学 ボ キ ャ プ ラ リ ー	留学ボキャブラリー	1 前	1			○								兼 3		
		留学コミュニケーション	1 前	1			○								兼 3		
		リスニング・スキル I A	1 前	1			○				1				兼 2		
		リスニング・スキル I B	1 後	1			○				1				兼 2		
		リーディング・スキル I A	1 前	1			○								兼 3		
		リーディング・スキル I B	1 後	1			○				1				兼 2		
		リーディング・スキル II A	2 前	1			○								兼 2		
		リーディング・スキル II B	2 後	1			○								兼 2		
		ボキャブラリー I	1 後	1			○								兼 3		
		ボキャブラリー II A	2 前	1			○								兼 2		
		ボキャブラリー II B	2 後	1			○								兼 2		

教 育 課 程 等 の 概 要

(国際交流学部 国際交流学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当 年次	単 位 数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
基幹 教育科目	英語プログラム	グラマー・コアⅠA	1前	1			○			1					兼2	
		グラマー・コアⅠB	1後	1			○				1				兼2	
		グラマー・コアⅡA	2前	1			○			1					兼1	
		グラマー・コアⅡB	2後	1			○			1					兼1	
		シンボル・ビルディング	1前	1			○				1				兼2	
		グローバル・リスニングⅠ	1後	1			○								兼3	
		グローバル・リスニングⅡA	2前	1			○			1					兼1	
		グローバル・リスニングⅡB	2前	1			○				1				兼1	
		グローバル・リスニングⅡC	2後	1			○			1					兼1	
		グローバル・リスニングⅡD	2後	1			○								兼2	
		スピーキング・スキルⅠ	1後	1			○								兼3	
		スピーキング・スキルⅡA	2前	1			○			1					兼1	
		スピーキング・スキルⅡB	2後	1			○			1					兼1	
		英語総合演習ⅠA	1前	1			○				1					
		英語総合演習ⅠB	1後	1			○				1					
		英語総合演習ⅡA	2前	1			○								兼1	
		英語総合演習ⅡB	2後	1			○								兼1	
		小計 28 科目	—	28	0	0	—	—	—	1	1	0	0	0	兼8	—
	学外 プログラム	海外語学研修Ⅰ	1前	2					○		1					
		海外語学研修Ⅱ	2前		4				○		1					
小計 2 科目		—	2	4	0	—	—	—	0	1	0	0	0	0	0	
	中計 64 科目	—	42	46	0	—	—	—	4	2	2	0	0	兼19	—	
専門 教育科目	日本文学 プログラム 探究	日本人文地理研究	3前		2		○			1						
		日本史研究	3前		2		○					1				
		日本近代史研究	3後		2		○					1				
		日本文明研究	3前		2		○			1						
		日本経済研究	3・4前		2		○			1						
		日本美術史研究	3・4前		2		○								兼1	
		日本藝能史研究	3・4後		2		○								兼1	
		日本習俗文化研究	3・4後		2		○								兼1	
		日本古典文学研究	3・4前		2		○								兼1	
		日本近代文学研究	3・4後		2		○								兼1	
		日本現代文化研究	3・4後		2		○								兼1	
		日本マンガ・アニメ研究	3・4後		2		○								兼1	
		日本宗教史研究Ⅰ	3・4前		2		○								兼1	
		日本宗教史研究Ⅱ	3・4後		2		○								兼1	
		関西文化研究	3・4前		2		○								兼1	
		比較文化論	4前		2		○					1				
		専門演習A	3前	1				○		3	1	1			兼2	
		専門演習B	3後	1				○		3	1	1			兼2	
		卒論研究A	4前	1				○		3	1	1			兼2	
		卒論研究B	4後	1				○		3	1	1			兼2	
		卒業論文	4通	4					○	3	1	1			兼2	
	小計 21 科目	—	8	32	0	—	—	—	3	1	1	0	0	兼7	—	

教 育 課 程 等 の 概 要

(国際交流学部 国際交流学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当 年次	単 位 数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専 門 教 育 科 目	英語プログラムⅡ	ボキャブラリーⅢA	3前	1			○								兼2	
		ボキャブラリーⅢB	3後	1			○								兼2	
		リーディング・スキルⅢA	3前	1			○					1				兼1
		リーディング・スキルⅢB	3前	1			○			1		1				
		リーディング・スキルⅢC	3後	1			○					1				兼1
		ライティング・スキル	3後	1			○			1		1				
		スピーキング・スキルⅢA	3前	1			○					1				兼1
		スピーキング・スキルⅢB	3後	1			○					1				兼1
		グローバル・リスニングⅢA	3前	1			○					1				兼1
		グローバル・リスニングⅢB	3前	1			○					1				兼1
		グローバル・リスニングⅢC	3後	1			○					1				兼1
		グローバル・リスニングⅢD	3後	1			○					1				兼1
		英語総合演習ⅢA	3前	1			○					1				
		英語総合演習ⅢB	3後	1			○					1				
		総合コミュニケーションA	4前	1			○					1				兼2
		総合コミュニケーションB	4後	1			○					1				兼2
		プレゼンテーション演習A	4前	1			○			1						兼2
		プレゼンテーション演習B	4前	1			○				1					兼2
		プレゼンテーション演習C	4後	1			○			1						兼2
		プレゼンテーション演習D	4後	1			○				1					兼2
		英米文学Ⅰ	3・4前		2		○									兼1
		英米文学Ⅱ	3・4後		2		○									兼1
小計 22 科目		—	20	4	0	—			1	1	1	0	0	兼9	—	
専 門 教 育 科 目	人材交流マネジメントプログラム	異文化理解基礎	1前	2			○								兼1	
		心理学基礎	1後	2			○				1					
		哲学	2後		2		○								兼1	
		文化人類学	2前		2		○			1						
		人間関係論	2前		2		○				1					
		集団心理学	3前		2		○								兼1	
		対人コミュニケーション論	3後		2		○				1					
		異文化コミュニケーション論Ⅰ	3前		2		○			1						
		異文化コミュニケーション論Ⅱ	3後		2		○			1						
		ホスピタリティー論	3前		2		○								兼1	
小計 10 科目		—	4	16	0	—			2	1	0	0	0	兼3	—	
専 門 教 育 科 目	国際日本プログラム	国際関係論	1前		2		○								兼1	
		国際経済学	2前		2		○			1						
		アジア海域交流史	2後		2		○								兼1	
		多文化共生論	3前		2		○				1					
		日本近代外交史	3後		2		○					1				
		日本・欧米関係論	3・4前		2		○								兼1	
		日本・アジア関係論	3・4後		2		○			1						
		アジア経済事情	3・4後		2		○			1						
		マイノリティ研究	3・4後		2		○				1					
		国際交流演習(英語プレゼンテーション演習)	4前		1			○							兼1	
小計 10 科目		—		19		—			2	1	1			兼3		
中計 63 科目		—	32	71	0	—			4	3	2	0	0	兼22	—	

教 育 課 程 等 の 概 要

(国際交流学部 国際交流学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
関連教育科目	創造力開発プログラム	創造力開発Ⅰ	3・4前		2		○								兼1	
		創造力開発Ⅱ	3・4前		2		○								兼1	
		創造力開発Ⅲ	3・4後		2		○								兼1	
		小計3科目	—	0	6	0	—			0	0	0	0	0	兼3	—
	生き方学習プログラム	人物研究Ⅰ	1・2後		2		○								兼1	
		人物研究Ⅱ	2・3前		2		○			1						
		人物研究Ⅲ	3・4前		2		○								兼1	
		小計3科目	—	0	6	0	—			1	0	0	0	0	兼2	—
	近隣アジア地域研究プログラム	中国研究	2・3前		2		○								兼1	
		台湾研究	2・3後		2		○								兼1	
		韓国研究	2・3後		2		○								兼1	
		タイ研究Ⅰ	2・3前		2		○				1					
		タイ研究Ⅱ	2・3後		2		○								兼1	
		ベトナム研究	2・3前		2		○								兼1	
		中国語A	3・4前		1			○							兼1	
		中国語B	3・4後		1			○							兼1	
		ハングルA	3・4前		1			○							兼1	
		ハングルB	3・4後		1			○							兼1	
		アジア文化研究	3・4前		2		○				1					
	小計11科目	—	0	18	0	—			2	0	0	0	0	兼7	—	
	情報技術プログラム	情報処理基礎演習A	1前	1				○							兼2	
		情報処理基礎演習B	1前	1				○							兼2	
		情報処理演習A	1後	1				○							兼2	
		情報処理演習B	1後	1				○							兼2	
		小計4科目	—	4	0	0	—			0	0	0	0	0	兼2	—
キャリアプログラム	キャリア・デザイン	1・2前	2			○				1						
	キャリア・プランニング	2後	2			○								兼1		
	小計2科目	—	4	0	0	—			0	1	0	0	0	兼1	—	
健康プログラム	健康スポーツ演習Ⅰ	1・2・3・4前		2			○							兼1		
	健康スポーツ演習Ⅱ	1・2・3・4後		2			○							兼1		
	小計2科目	—	0	4	0	—			0	0	0	0	0	兼1		
中計25科目		—	8	34	0	—			3	1	0	0	0	兼14	—	
合計152科目		—	82	151	0	—			5	3	3	0	0	兼40	—	

学位又は称号	学士(文学)	学位又は学科の分野	文学関係										
卒業要件及び履修方法		授業期間等											
<p>必修 82 単位、選択科目から 42 単位(含む選択必修 39~40 単位、系列任意 3~2 単位)以上を修得し、124 単位以上修得すること。 選択必修 39~40 単位はつぎのとおりとする。</p> <p>(1) 基幹教育科目 日本学プログラム基礎教養の日本学基礎教養各選択科目から 6 単位 日本学プログラム基礎教養の上記以外の選択科目から 6 単位</p> <p>(2) 専門教育科目 日本学プログラム探求の選択科目から 8 単位 人材交流マネジメントプログラムの選択科目から 4 単位 国際日本プログラムから 2 科目 (3~4 単位)</p> <p>(3) 関連教育科目 創造力開発プログラムから 2 単位 生き方学習プログラムから 2 単位 近隣アジア地域研究プログラムから 2 単位</p> <p><注> 基幹教育科目の日本学プログラム基礎教養と日本語強化プログラムについて、日本人学生と留学生は次のとおり必修とする。</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="text-align: center;">日本人学生</td> <td style="text-align: center;">留学生</td> </tr> <tr> <td>日本学基礎教養 I A (人文地理)</td> <td>日本学基礎教養 I α (地理基礎)</td> </tr> <tr> <td>日本学基礎教養 I B (歴史)</td> <td>日本学基礎教養 I β (歴史基礎)</td> </tr> <tr> <td>日本語演習 I A (読解と要約)</td> <td>日本語演習 I α (日本語)</td> </tr> <tr> <td>日本語演習 I B (語彙・漢字)</td> <td>日本語演習 I β (日本語)</td> </tr> </table> <p>海外留学による外国の大学での修得単位を、卒業に必要な必修・選択科目の単位として教授会で審査の上、一部認定することができる。 (履修科目の登録の上限:44 単位(年間))</p>		日本人学生	留学生	日本学基礎教養 I A (人文地理)	日本学基礎教養 I α (地理基礎)	日本学基礎教養 I B (歴史)	日本学基礎教養 I β (歴史基礎)	日本語演習 I A (読解と要約)	日本語演習 I α (日本語)	日本語演習 I B (語彙・漢字)	日本語演習 I β (日本語)	1 学年の学期区分	2 学期
		日本人学生	留学生										
		日本学基礎教養 I A (人文地理)	日本学基礎教養 I α (地理基礎)										
日本学基礎教養 I B (歴史)	日本学基礎教養 I β (歴史基礎)												
日本語演習 I A (読解と要約)	日本語演習 I α (日本語)												
日本語演習 I B (語彙・漢字)	日本語演習 I β (日本語)												
1 学期の授業期間	1 5 週												
1 時限の授業時間	9 0 分												

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要				
(国際交流学部 国際交流学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
基 幹 教 育 科 目	日 本 学 プ ロ グ ラ ム 基 礎 教 養	日本学基礎教養ⅠA (人文地理)	日本学を学ぶ基礎として、人文地理学の視角からグローバル化時代の日本をどう理解していくか説明する。まず時間と空間の圧縮が進む今日の世界における日本の位置と役割の理解にむけて、貿易や海外投資、人や情報の流動に注目する。つづいて、グローバル化が日本の産業立地や人口分布、土地利用にどのように反映しているかを検討しながら、日本の地域構造を理解する。さらに都市の構造と人々の居住の変化に注目して、グローバル化時代の日本の都市を考える。	
		日本学基礎教養Ⅰα (地理基礎)	留学生が日本学を学ぶ上で必要な、最も基本的な日本地理の知識を身につける。留学生にとって弱点となりがちな、都道府県や主要都市、河川、平野、山地の位置と名前(読み方)といった基礎知識を修得する。その際、個々の知識を、各地の産業や文化、地域構造、人口動態などの人文地理的諸要素と有機的に結びつけることによって、グローバル化と共に変化しつつある現代日本の姿を捉えていく。	留学生用
		日本学基礎教養ⅠB (歴史)	日本学を学ぶ基礎として、日本史の概略を説明する。一般的な時代区分による通史(政治史)はもちろんであるが、日本人の生活や文化の変遷に力点を置いた歴史を取り上げる。また、宗教史、教育史、美術史などの視点からも、それぞれの時代の日本人のものの考え方や生き方の特徴を追い求める。可能な限り、多くの人物を取り上げ、その思想や果たした役割を検証する。なお、歴史上のキーワードについては、英語訳も学ぶ。	
		日本学基礎教養Ⅰβ (歴史基礎)	留学生が日本学を学ぶ上で必要な、最も基本的な日本史の知識を身につける。留学生にとって弱点となりがちな、各時代の区分や主要な事件の時期と名前(読み方)、およびその内容を修得する。その際、歴史の大きな流れを俯瞰しつつ、個々の知識をそれぞれの時代の経過と事象とに結びつけ、また、それらが日本人のものの考え方や生き方の特質、日本の風土にどのように関係しているかに着目して、日本の歩みを概観する。	留学生用
		日本学基礎教養ⅠC (習俗文化)	伝統行事、習慣、しきたり等といった日本の習俗文化は、日本人の生活様式を物心両面から形づくっている。また、古くから語り継がれてきた民話、神話、伝承等からも日本人の心や生活のあり方を規定している。本講義では、こうした習俗文化について、基礎的な事項を紹介するところから始めて、日本で伝えられている代表的な行事・習慣・物語の事例を、系統立った知識として身につけられるように講述する。	

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基 幹 教 育 科 目	日 本 学 プ ロ グ ラ ム 基 礎 教 養	日本学基礎教養ⅠD (政治)	近代日本における政治について、その成り立ち、形態等の基礎的なことがらから始めて、現在の政治の形がいかにして形成されてきたかを講述する。近代日本は明治期から立憲君主制をとり、政党政治の形をとって今日まで来た。この過程の中で起きた様々な歴史的イベントやそれともなうて生じてきた諸問題についても紹介し、これらの経緯や現代日本が立ち向かうべき本質的問題を考察する。
		日本学基礎教養ⅠE (社会)	日本の社会の特質について基礎的な事項を、社会的な視点から講述する。講義では、日本の社会を成立させているシステム、都市の特有の性質、家族制度の変遷、労働環境の変化等について、それぞれの要素がどのように構成されているかを中心に紹介する。またその上で、これら諸要素が持っているさまざまな問題について、新聞・雑誌等で報道されたトピックから身近で具体的な事例を挙げながら考察を加えていく。
		日本学基礎教養ⅠF (自然)	日本列島を形成している山地、河川、海洋、湖沼、平野や、気象、地下資源等といった地理的・地質学的な自然条件、また日本に生息する動植物の特質や生態、さらに、日本にとりわけ多く見られる地震や津波などの自然災害について講述する。こうした自然条件から生みだされた景勝地や自然遺産についても紹介し、日本の美しい風土がいかにして形成されているかを考察する。
		日本学基礎教養ⅡA (近代史)	日本学基礎教養ⅠB(歴史)に引き続いて、幕末・明治維新以降の日本の歴史について、基礎的な事項を取り上げて紹介し、それぞれの事件・事象が生じた要因について考察する。日本は明治維新という一大変革を経て、西洋諸国以外では他に類を見ないほど飛躍的な近代化を推し進め、近代資本主義国家を成立させた。本講義では、これらの経緯と、その後の日本が迎った政治・社会・外交上の諸々の変化を追いながら、現代の日本の姿に至るまでの歴史を講述する。
		日本学基礎教養ⅡB (文学)	日本の文学史の上で代表的な作品の数々を紹介し、読み聞かせも行いながら作品を鑑賞しつつ、そこに込められた日本人の美意識を探る。日本の文学は、古くは中国の、近代以降は西洋の強い影響を受けながらも、やまと言葉と漢語・外来語を巧みに織り交ぜながら、一方では世界最初の長編小説『源氏物語』を生みだし、他方では世界最短の定型詩のひとつである俳句を生み出した。講義では、様々な作例を受講生と共に読んで、世界にも類い希なる文学の世界を味わっていく。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基 幹 教 育 科 目	日 本 学 プ ロ グ ラ ム 基 礎 教 養	日本学基礎教養ⅡC (芸術)	日本の美術について、仏教美術史と近世絵画史から代表的な名品を取り上げ、それらの図像と様式を講述する。日本美術史には、仏教公伝から鎌倉時代にかけて隆盛を見た仏教美術と、やまと絵と漢画の伝統を融合させた室町時代以降の近世絵画の二つの大きな流れが存在する。これらを主として、さらに明治期から戦後にかけて西洋の影響を受けて成立した近代絵画と、逆に西洋世界に進出している日本の現代アートとデザインの諸相についても講述する。
		日本学基礎教養ⅡD (経済)	日本経済における戦後 60 年間の変遷をたどりながら、その中で、まず企業活動、国民生活、社会保障、財政・金融、産業構造などといった国内経済に関係する基礎的な主要項目について検討し、さらに、国際貿易や国際金融など国際的な側面から見た日本経済の特徴について解説を行う。そして、最後に、これら日本経済の現状と世界的に進行する経済のグローバル化の動きを踏まえつつ、これからの日本経済が直面するであろう課題について整理し考察する。
		日本人の心性Ⅰ	(神道基礎) 日本文化の基盤であるとされる神道について、概説する。祖先神や自然神への信仰から生まれた民間信仰から、後に仏教や儒教の影響を受け、明治時代には国家神道として成立するまでの歴史を把握する。日本のあちこちに多数存在する神社と人々の生活との関係や、さらには儀礼などを通じての日本人の神信仰の特徴を探り出す。また、広くアジアを見渡し、各国または各民族の民間信仰との比較を試みる。
		日本人の心性Ⅱ	(仏教基礎) 日本人の信仰の基盤に陣取っているひとつの信仰としての仏教の概説を行なう。インドで生まれた仏教の日本への伝来の歴史を学び、仏教が国教として大きな力を持った奈良時代や新仏教が誕生した鎌倉時代など、日本での変容と歴史を追う。その上で、仏教が一般日本人の生活やものの考え方にもどのように影響したかを探る。仏壇、檀家、葬式などを通して、現代日本社会と仏教の関係をも考える。
		日本人の心性Ⅲ	(儒教基礎) 孔子を開祖とする儒教は、17 条憲法にもその影響が見られるように、早くから日本へ伝来し日本人のものの考え方、とりわけ倫理観に大きな影響を与えた。その歴史ととりわけ日常生活の実践倫理である論語は、江戸時代以降日本独自の発展を遂げるなかで、教育勅語にみられるように明治時代に教育の中心を担った理由を探る。また、儒教から生まれた朱子学や陽明学といった学問体系にも考察を加える。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基 幹 教 育 科 目	日 本 学 プ ロ グ ラ ム 基 礎 教 養	日本文明論	日本列島に育まれた日本文明は、世界文明のひとつとされている。その日本文明について概説する。世界の文明史論の中での日本文明の特質を比較論的に明らかにし、近代化成功や文化構造、さらには政治社会構造の視点から文明を捉える。また、独立文明と衛星文明に分ける文明論、さらには文明の衝突論についても言及する。
		日本神話論	一つの民族のものの考え方、感じ方の方式をつかさどっているのは、民族が古くから語り継いできた神話・伝承に表れた世界観である。日本においては、『古事記』、『日本書紀』や、各地に伝えられた風土記等に著されている物語の中に、日本人の発想や行動の諸形式が表れている。本講義では日本の神話から代表的なエピソードを取り上げて紹介し、神話学的な観点から、そこに語られている世界観について講述する。
		憲法	(日本国憲法) 憲法は、一般市民の権利や自由などの基本的人権を保障する法規範であり、国の統治や国家権力のあり方を定める法規範であって、他の法令の最上位に位置する「国の最高法規」である。日本国憲法全般の基本的知識・内容をテーマとして取りあげる。基本的人権に関わる問題、国会・内閣・裁判所に関わる問題、あるいは憲法改正に関わる問題等について講義する。
		基礎演習 I A	大学での勉学を始めるにあたって、まず必要な心構えを身につけるよう指導する。大学生であることの責任を自覚し、遅刻欠席をせず講義・演習に参加し、チューターやクラスメイトとの間で報告・連絡・相談を実践し、大学の一員として相応しい態度で学内外の物事に臨めるようにする。その上で、大学での勉強に必要な、読む・書く・話す・聞くの能力、すなわち思考力・表現力・コミュニケーション能力の育成を目指す。演習では、レポートの書き方について、とりわけ書式、体裁、引用のルールとマナーを徹底する。
		基礎演習 I B	前期(基礎演習 I A)に引き続き、基礎的なスタディ・スキルの修得に努める。学生は課題に従って調査・考察し、資料を作ってクラスメイトの前で発表を行う。調査等で知った他人の知見と、自らの見解・解釈とを明確に区別して、他者に伝えることができるよう、また同時に、発表を聞いた者が、その趣旨に沿った質問ができるよう、指導する。できるだけ、批判的な視点を入れた質問ができるように促す。また、資料の読解や発表の聴取を通じて知り得たことを的確に要約し、ノートにまとめることができる力を養う。

授 業 科 目 の 概 要				
(国際交流学部 国際交流学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
基 幹 教 育 科 目	日本学 プログラム 基礎 教 養	基礎演習ⅡA	1年次(基礎演習ⅠAB)からの発展として、より学術的なレポート・論文の形式を学び、その形式に従った調査・考察・発表・討論・まとめができるように指導する。論題について、序論・本論・結論の形式を守って論を構成し、自らの立論を展開するための論点を探し出し、論点を下支えする根拠を提示して、できるだけ説得力のある発表を組み立てることを目標とする。その過程で、適切な批判的思考力を身につけていけるように、繰り返し練習を行わせる。	
	基礎演習ⅡB	大学生活前半の締めくくりとして、基礎演習ⅡAまでに身につけた能力をさらに伸ばして行くことを目指す。レポート・論文の構成を身につけるとともに、自分の論旨を自分自身で十分に理解し、それに従って短い言葉で的確に標題をつけ、標題をみただけで発表全体の要旨が何であるか分かるように工夫ができるよう指導する。また、討論においては、発表者に意図を適切に捉え、それに対して建設的な意見を述べるができるように、繰り返し練習を重ねていく。		
基 幹 教 育 科 目	日本 語 強 化 プ ロ グ ラ ム	日本語演習ⅠA(読解と要約)	具体的な物語的文章の「あらすじ」抽出から、抽象度の高い論説的文章の「要点」抽出までを通して、大学で必要とされる情報処理能力を伸長することを目指す。多量の情報を処理するためには、テキストを一言一句丁寧に理解するボトムアップ式の読み方だけでなく、テキストの全体構造を予測しながら理解するトップダウン式の読み方が必須である。教室内での「要約」活動を通して、トップダウン式の読み方を鍛え、効率的な情報処理ができるようにする。	
		日本語演習Ⅰα(日本語)	留学生対象科目。聴解と作文・表現を中心に、大学での学習に必要な日本語能力を更に高める演習を行う。日本語の聴解をより容易にするために、受講生のレベルに応じてニュース、ドキュメンタリー、対談、映画等の映像や、ラジオ番組等の音声教材を選び、内容を的確に聞き取る能力を養う。次いで、聴解教材の内容について理解度をチェックし、要約作業を通して内容を過不足なく論理的に再構成する能力を養う。また、教材中から日本語として自然な会話表現に留意して、表現の練習を行う。	留学生用
		日本語演習ⅠB(語彙・漢字)	漢字の学習を通して、当該学習漢字だけでなく、和語・漢語ともに、類義語を併せて習得することを目指す。当該漢字の基本的な情報(画数・部首・読み等)だけでなく、当該漢字を含む熟語の用例を、学生が主体的に収集し、それらを教室で共有・分類することで、当該学習漢字の基本的な意味から周辺の意味まで、その意味の広がり进行学习する。また、類義語との微妙な使い分けを意識することで、表現の際に、より適切な語彙を選択できるようにする。	

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要				
(国際交流学部 国際交流学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
基 幹 教 育 科 目	日 本 語 強 化 プ ロ グ ラ ム	日本語演習 I B (語彙・漢字)	漢字の学習を通して、当該学習漢字だけでなく、和語・漢語ともに、類義語を併せて習得することを目指す。当該漢字の基本的な情報(画数・部首・読み等)だけでなく、当該漢字を含む熟語の用例を、学生が主体的に収集し、それらを教室で共有・分類することで、当該学習漢字の基本的な意味から周辺の意味まで、その意味の広がり进行学习する。また、類義語との微妙な使い分けを意識することで、表現の際に、より適切な語彙を選択できるようにする。	
		日本語演習 I β (日本語)	留学生対象科目。漢字・語彙と読解を中心に、大学での学習に必要な日本語能力を更に高める演習を行う。漢字や熟語の読み書きについて、間違えやすい字句を中心に練習する。また、受講生のレベルに応じて人文・社会科学系の論説文や新聞記事等を選び、これを読みながら、キーワードとキーセンテンスの抽出や、接続詞に注意した論理構造の把握を練習して、内容を的確に読み取る能力を養う。同時に、教材中から漢字・熟語の用法を学び、文脈に応じた語彙を選択して自然な日本語表現ができるように練習する。	留学生用
		日本語演習 I C (プレゼンテーション)	自分が獲得した情報を、相手に向けて、わかりやすく伝達できるようになることを目指す。教室では、「プレゼンテーション」の形式をとり、情報の再構成(情報の取捨選択、要約、提出順序等)、副次的な資料の作成(パワーポイント、紙媒体等)などに重点を置き、聞き手にとって、わかりやすい情報提供の仕方を学ぶ。聞き手の積極的なフィードバックによる双方向のコミュニケーション活動を通して、相手の理解に配慮した表現ができるようにする。	
		日本語演習 I D (表現・敬語)	さまざまな場面を想定し、相手を敬うための敬語、場に配慮した敬語が使い分けられるようになることを目指す。敬語の分類、機能といった理論的な学習だけでは、実際の言語生活の中で敬語に触れる機会の少ない学生にとって、運用レベルまで敬語を習得することは難しい。教室では、社会的立場の付与された公の身分として、敬語を強いられる状況を想定した実践を通して、相手・場に配慮するという意識を養い、スムーズな敬語の運用ができるようにする。	
		日本語演習 II A (ディスカッション)	ディスカッション活動を通して、理解・表現の即時的な調整を行う能力の伸長を目指す。ディスカッションでは、相手の意見を理解することで、準備しておいた自分の意見を調整する必要がある。相手の意見に矛盾がないか論理的に理解し、さらに、自身の意見との異同を分析することで、次の自分の発言を決定するというプロセスを、限られた時間の中で行えるようにする。フィードバックは、対話の即時性を損なわないよう、活動を撮影した映像資料を用いて行う。	

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基 幹 教 育 科 目	日 本 語 強 化 プ ロ グ ラ ム	日本語演習ⅡB (文章表現法)	媒体、相手、内容に配慮した文章表現方法を学び、実際のコミュニケーションで運用できるようにすることを目指す。口頭表現に比べ、文章表現は、即時的な調整が困難であるため、意図を誤解なく伝える必要がある。例えば、e-mail という媒体であっても、相手が友達であるか先生であるか、また、同じ友達であっても、遊ぶ約束をするのかゼミ合宿の予定を伝えるのかでは、その表現のし方が異なる。このように、それぞれの場面に応じた文章表現を、意識的に使い分けができるようにする。
		日本語演習ⅡC (ディベート)	競技形式のディベート方法を学び、議論の相手だけでなく、聴衆を説得できるようになることを目指す。価値命題・政策命題のディベートを通して、議論をする人は、論理的な意見 (ロゴス) に加え、権威者の引用 (エトス) や、声色や表情などのパフォーマンス (パトス) 等、修辭的技法の効用を学び、実践を通して、説得力のある議論ができるようにする。それに対して、聴衆役の学生は、感情や権威に惑わされることなく、論理的に議論が展開しているかを判断することができるようにする。
		日本語演習ⅡD (文章表現法)	大学でのレポート・論文等、公的に用いられる文体を習得することを目指す。論文・レポートは、論理的な内容を硬い文体で書くことが要求される。そのためには、先に結論を述べてから、その結論の根拠を補足するという論理展開のパターンの習得や、「結構」のように、漢語であっても、必ずしも硬い文体に用いられないものの学習が必要である。教室では、文章構成の論理的なパターン、そして、具体的な硬い文体を、文章作成の実践を通して運用できるようにする。
		日本語研究 A (格言・ことわざ・故事成語)	日本語の「格言・ことわざ・故事成語 (中国からの流入を含む)」について、時間が流れ、社会が変革した現在であっても、それらが使用されているという事実について、研究する。学生の興味に合わせ、ある格言の現代の使用場面の調査や、故事成語を用いることで、どのような印象を与えるのかといった研究、時代の流れの中で、意味が変化したことわざの通時的研究などを行う。これらの研究を通して、日本文化の理解の一端に迫ることを目指す。
		日本語研究 B (文藝)	学生の興味に沿った文藝作品をとりあげ、その作品に対する個々の学生の理解・解釈を共有することで、より豊かな鑑賞ができるようにする。内容の正しい理解というテキスト内的な理解だけでなく、作品に書かれた言葉を通して、学生が主体的に解釈を加えて読解していくというテキスト外への広がりのある理解ができるようにする。作品をもとにした自己と他者とのインターアクション活動により、その作品の持つ、多くの魅力を掴み取ることを目的とした主体的な鑑賞方法を学ぶ。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基 幹 教 育 科 目	英 語 プ ロ グ ラ ム Ⅰ	留学ポキャブラリー	本科目では、留学を有意義な体験にするために、留学生活に関連する単語や語句(表現)を身につける。発音にも留意し、実生活で通じるレベルにまで訓練する。日常生活の中で使われる語句には、日本の学校で学ぶ機会のないものが少なくない。留学先の実際の生活環境で使用する語句を学ぶことにより、コミュニケーション手段としての英語の役割を理解するとともに、言葉を学ぶことへのモチベーションを高める。学習の基本的手法としては、記憶に残り易く、実際に使う際に容易に取り出せるなど、実践的な英語力が身に付きやすい日本語→英語の順序での音声的な訓練を重視する。
		留学コミュニケーション	本科目では、海外での生活や授業において、すぐに役立つ会話表現を身につけることを目的とした訓練を行う。実用的な会話力を短期間で身につけるため、使用英文は、頻度、重要度および長さなどに配慮するとともに、スロー音声による確実なインプット、日本語→英語の順序による通訳練習、パターン・プラクティスなどの方法により、最大の効果を引き出す。リスニング能力については、先に使用した会話表現を120%の高速で聴いて、語句の並べ替え訓練などを行うことにより、実生活の速度についていける能力を養う。
		リスニング・スキル I A	本科目では、リスニングの基礎力を養う。また、並行して、高度な素材を段階的に導入することにより、上級レベルのリスニング力への布石を打つ。ここでは、初級レベルの学習者にとっては過剰な負担となる多様な英語を聴くことを避け、アメリカ英語の明瞭な音声を使用する。訓練は、スローな音声のリピーティングをナチュラルスピードのシャドーイングにつなげ、その後、音声を聴いて語句の並べ替えを行う。また、まず英語の音声に慣れることに主眼を置き、スクリプトや和訳、単語リストなどはすべてははじめから与える。訳は、全訳と直読直解釈の2種類を用意し、全訳によって内容全体のイメージをつかみ、それをベースにして英語の語順に従い意味を読み取っていく。情報の受信能力、検索能力を高めるために内容把握の訓練も行う。
		リスニング・スキル I B	本科目では、前期で学んだリスニング・スキル I Aの学習内容について復習しつつ、さらに訓練を重ねる。I Aとの違いは、英文の比重が物語的なものからより社会生活的なものに移る。また、高度な素材の割合を段階的に増やしていく。訓練は、スローな音声のリピーティングをナチュラルスピードのシャドーイングにつなげ、その後、音声を聴いて語句の並べ替えを行う。また、まず英語の音声に慣れることに主眼を置き、スクリプトや和訳、単語リストなどをすべてははじめから与える。訳は、全訳と直読直解釈の2種類を用意し、全訳によって内容全体のイメージをつかみ、それをベースにして英語の語順に従い意味を読み取っていく。情報の受信能力、検索能力を高めるために内容把握の訓練も行う。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基 幹 教 育 科 目	英 語 プ ロ グ ラ ム	リーディング・スキル I A	本科目では、発音の訓練を含め、ワード単位で英語を正確に読み取る訓練を行う。ここでは、リーディングとリスニングは明確に区別する一般的な方法から決別し、両者を表裏一体のものであるととらえ、「リスニング訓練無しには、リーディング訓練無し」という方針を取る。つまり、より効果的に身につけるために、リスニングから入り、しっかりと聴き取り、自信をもって読み上げる方法で訓練を行う。学習手法としてはリピーティング、シャドーイングを繰り返し、自律的に音読して、直読直訳が行なえるようにする。加えて、情報の検索力を高めるため、内容把握の訓練も実施する。
		リーディング・スキル I B	本科目では、チャンク単位で60%の英語を正確に読み取れることを目指す。また、学んだ素材を活用し、意味記憶とコロケーションによる記憶を組み合わせ、語彙力を高めることを目標とする。ここでは、「リスニング訓練無しには、リーディング訓練無し」という原則に立ち、リスニングから入り、しっかりと聴き取り、自信をもって読み上げることにより、確実に身につけさせる。学習方法としてはリピーティング、シャドーイングを繰り返し、自律的に音読して、直読直訳が行なわれるようにする。内容把握の訓練も実施する。その場合、設問には、主に日本語を使用し、英文の読み取りに集中させる。解答は、時間をおいて、2度、3度繰り返しさせ、そこに差異が生まれる理由について検討させることで、内容にたいする追究力を養う。
		リーディング・スキル II A	本科目においては、チャンク単位で80%の英語を正確に読み取れることを目指す。ここでは、「リスニング訓練無しには、リーディング訓練無し」という立原則に立ち、リスニングから入り、しっかりと聴き取り、自信をもって読み上げることにより、確実に身につけさせる。学習方法としてはリピーティング、シャドーイングを繰り返し、自律的に音読して、直読直訳が言えるようにする。内容把握の設問は、前半においては日本語とし(設問の意図が明確に分かるため、英文の読解に集中できる)、段階的に英語の設問に移行していく。解答は、時間をおいて、2度、3度と繰り返しさせ、そこに差異が生まれる理由について検討させることで、内容にたいする追究力を養う。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基 幹 教 育 科 目	英 語 プ ロ グ ラ ム Ⅰ	リーディング・スキルⅡ B	本科目では、これまでの音声訓練をベースにおいたリーディングから黙読へと移行する。ここでは、サポートは語句のみで、和訳を前もって与えることはせず、自力でスキミング（要旨把握）、スキヤニング（情報読み取り）を行い、パラグラフ単位で60%の内容が素早くつかめることを目標にする。内容把握の設問は、前半においては日本語とし（設問の意図が明確に分かるため、英文の読解に集中できる）、段階的に英語の設問に移行していく。解答は、時間をおいて、2度、3度と繰り返させ、そこに差異が生まれる理由を検討させることで、内容にたいする追究力を養う。
		ボキャブラリーⅠ	英語を学ぶ上できわめて重要であるボキャブラリー（単語・熟語）を強化し、英語の理解力・表現力を飛躍的に伸ばすことを目標とする。ボキャブラリーの学習においては、①しっかりと聴き取れる、②文字を読み取って発音できる、という2つの点がまず重要である。つづりについては、①②を行いつつ、徐々に覚えていく効果的方法を採用する。また、意味については、文脈を利用して意味記憶で覚える方法、文脈と連動させたコロケーション（音声付き）を利用する方法などに加え、ゲーム性のある訓練方法を行なう。さらに、接頭辞、接尾辞、派生語などについても扱い、密接に関連付けられた情報として語彙を習得していく。
		ボキャブラリーⅡA	1年次に引き続き、ボキャブラリーの増強を行う。内容は、ビジネス・日本文化に関する初級の語彙とする。ボキャブラリーの学習においては、①しっかりと聴き取れる、②文字を読み取って発音できる、という2つの点がまず重要である。つづりについては、①②を行いつつ、徐々に覚えていく方法が効果的である。また、意味については、文脈を利用して意味記憶で覚える方法、文脈と連動させたコロケーション（音声付き）を利用する方法などに加え、ゲーム性のある訓練方法を行なう。さらに、接頭辞、接尾辞、派生語などについても扱うことにより、密接に関連付けられた情報として語彙を習得していく。
		ボキャブラリーⅡB	前期ⅡAに引き続き、さらにボキャブラリーを増強する。内容は、ビジネス・日本文化にかんする中級レベルの語彙が中心となる。ボキャブラリーの学習においては、①しっかりと聴き取れる、②文字を読み取って発音できる、という2つの点がまず重要である。つづりについては、①②を行いつつ、徐々に覚えていく方法が効果的である。また、意味については、文脈を利用して意味記憶で覚える方法、文脈と連動させたコロケーション（音声付き）を利用する方法などに加え、ゲーム性のある訓練方法を採用する。さらに、接頭辞、接尾辞、派生語などについても扱うことにより、密接に関連付けられた情報として語彙を習得していく。

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基 幹 教 育 科 目	英 語 プ ロ グ ラ ム ー	グラマー・コアⅠA	本科目では、主に英語の叙実的な側面を重点的に扱う。実用的な英語力を身につける上で、本当に必要な文法はわずかでしかなく、またそのほとんどは非常にシンプルである。ここでは、エマージェントグラマーやレキシカルグラマー、認知文法など、最新の英文法の知見を活用して、中学校、高等学校で学んだ文法を整理し、「文法の根幹」ともいべき点を重点的に取り上げる。また、これと並行して、動詞の語形変化など、形式に焦点を当てた訓練も行い、最小の労力で実用的な文法力を身につけることができるように配慮する。
		グラマー・コアⅠB	本科目では、前期に学んだ点を復習しつつ、引き続き、英語をシンプルに、かつ正確にとらえる視点を養う。グラマー・コアⅠAにおいては、主に英語の叙実的な側面を重点的に扱うのにたいし、本科目では叙想的な表現方法に重点をおいた解説を行う。解説は、認知的なアプローチをとり、図解を活用して、最小限の文法解説・文法用語で展開していく。中学校・高等学校で学んだ英文法の根幹部分を理解し、比較級などの形式的な面にも十分に慣れるなど、しっかりとした文法の基盤形成をめざす。
		グラマー・コアⅡA	本科目では、1年次に学習した内容を復習しつつ、さらに理解を深める。また、読解訓練や演習を増やすことにより、文法力の確実な定着を目指す。訓練や演習は、実践的であることを絶対的な基準とし、態の変換や話法の変換などの、「文法演習のための文法演習」は一切行わない。つまり、規則（文法）に照らし合わせて言葉を使うという発想では、実用的な英語力は身に付きにくい。英語は外国語のため、文法学習を完全に避けることはできないが、最小限に抑える。グラマー・コアⅡAではⅠA・ⅠBに引き続いて、この原則を踏まえた上で訓練を行う。
		グラマー・コアⅡB	本科目では、前期ⅡAの学習内容を復習しつつ、最終的な定着を図る。ここでは、外国語を学習する限りにおいて、文法の訓練は必要であるが、「どのような文法が必要か」という点を慎重に検討した上での訓練を行うことを原則とする。つまり、「学問の対象としての英文法」と「実用的に英語を習得するための英文法」の違いが明確に分かるとともに、微妙なニュアンスを含め、的確自在に文意をくみ取る力の養成を目指す。実践的な英文法力を身につけると、リスニング力、リーディング力などの受信力が伸長し、それがより難度の高いライティング力、スピーキング力などの発信力の向上にもつながっていく。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要				
(国際交流学部 国際交流学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
基 幹 教 育 科 目	英 語 プ ロ グ ラ ム ー	シンボル・ビルディング	本科目では、「英語的な発想」を学ぶことによって、日本人的な発想を突破し、世界に通用する英語を身につけるための基礎を養うことを目標とする。たとえば、日本語で「～に驚く」という意味は、英語では「～に驚かされる」と表現するように、「英語的な発想」を取り上げる。こうした発想は、名詞や形容詞などにおいても数多く見られるが、日本的発想では出てこない代表的なものを取り出し、学習する。また、その背景としての物の見方や考え方についても解説し、異文化学習のひとつとする。	
		グローバル・リスニング I	本科目においては、多様な英語のチャンク単位の聴き取りを40%可能にすることを旨とする。学習手順としては、まずアメリカ英語をベースにした基礎訓練を行い、その後イギリス英語、そして、それらが混ざり合ったもの、さらにアラブ系英語、ヒスパニック系英語などを聴く応用練習を行う。基礎訓練においては、スロー音声とナチュラルスピードの音声の2種類を使い、確実なステップを踏んで、リピーティングおよびシャドーイングを行う。スクリプト・語句などは事前にすべて与え、音声と意味に焦点を絞った訓練を行う。また、初出の英文にたいして英語による設問に答える形式による実践的な訓練も行う。	
		グローバル・リスニング II A	グローバル・リスニングIで培ったリスニング力をベースに、本科目ではチャンク単位の聴き取りを60%可能にすることを旨とする。学習手順としては、まずアメリカ英語をベースにした基礎訓練を行い、その後イギリス英語、そして、それらが混ざり合ったもの、さらにアラブ系英語、ヒスパニック系英語などを聴いて応用練習を行う。基礎訓練においては、スロー音声とナチュラルスピードの音声の2種類を使い、確実なステップを踏んで、リピーティングおよびシャドーイングを行う。スクリプト・語句などは事前にすべて与え、音声と意味に焦点を絞った訓練を行う。また、初出の英文にたいして英語による設問に答える形式による実践的な訓練も行う。	
		グローバル・リスニング II B	グローバル・リスニングII Aで培ったリスニング力をベースに、本科目では、チャンク単位の聴き取りを80%までに引き上げることを旨とする。学習手順としては、まずアメリカ英語をベースにした基礎訓練を行い、その後イギリス英語、そして、それらが混ざり合ったもの、さらにアラブ系英語、ヒスパニック系英語などを聴いて応用練習を行う。基礎訓練においては、スロー音声とナチュラルスピードの音声の2種類を使い、確実なステップを踏んで、リピーティングおよびシャドーイングを行う。スクリプト・語句などは事前にすべて与え、音声と意味に焦点を絞った訓練を行う。また、初出の英文にたいして英語による設問に答える形式による実践的な訓練も行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基 幹 教 育 科 目	英 語 プ ロ グ ラ ム I	グローバル・リスニング II C	グローバル・リスニングII Bで培ったリスニング力をベースに、本科目では、多様な英語にたいしてセンテンス単位での聴き取りが60%程度可能になることを目指す。学習手順としては、まずアメリカ英語をベースにした基礎訓練を行い、その後イギリス英語、そして、それらが混ざり合ったもの、さらにアラブ系英語、ヒスパニック系英語などを聴いて応用練習を行う。基礎訓練においては、スロー音声とナチュラルスピードの音声の2種類を使い、確実なステップを踏んで、リピートイングおよびシャドーイングを行う。スクリプト・語句などは事前にすべて与え、音声と意味に焦点を絞った訓練を行う。また、初出の英文にたいして英語による設問に答える形式による実践的な訓練も行う。
		グローバル・リスニング II D	グローバル・リスニングII Cで培ったリスニング力をベースに、本科目では、センテンスレベルでの聴き取りが80%程度可能などところまで向上させることを目指す。学習手順としては、まずアメリカ英語をベースにした基礎訓練を行い、その後イギリス英語、そして、それらが混ざり合ったもの、さらにアラブ系英語、ヒスパニック系英語などを聴いて応用練習を行う。基礎訓練においては、スロー音声とナチュラルスピードの音声の2種類を使い、確実なステップを踏んで、リピートイングおよびシャドーイングを行う。スクリプト・語句などは事前にすべて与え、音声と意味に焦点を絞った訓練を行う。また、初出の英文にたいして英語による設問に答える形式による実践的な訓練も行う。
		スピーキング・スキル I	「スピーキング・スキルI」においては、1年次前期の留学コミュニケーション科目の内容を復習するとともに、初級レベルの実用的表現を増強する。学習手法としては、4つの主たる訓練を行う。(1)すでに使用した素材の暗唱、(2)その質疑応答の暗唱、(3)追加の定型的な表現の暗唱および(4)ワークグループ単位でのインターラクティブな使用や評価である。(2)～(3)については、すべて日本語→英語の瞬間的な通訳能力を求める。一般的に暗唱は否定的に評価されることが多いが、“非英語使用環境”において会話を養うには暗唱によって使える表現を増やしつつ、インターラクティブな訓練を行うのがもっとも効果的であるとの考えに立ち、暗誦を重視する。また、日本語を重視するのは、必要な英文を瞬時に検索できるようにするためである。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基 幹 教 育 科 目	英 語 プ ロ グ ラ ム Ⅰ	スピーキング・スキルⅡ A	1年次前期のリスニングおよびリーディング訓練で使用した素材からいくつかを選び、初級レベルの日常社会的な内容の口頭応答訓練を行う。学習手法としては、4つの主たる訓練を行う。(1)すでに使用した素材の暗唱、(2)その質疑応答の暗唱、(3)追加の定型的な表現の暗唱および(4)ワークグループ単位でのインターラクティブな使用や評価である。(2)～(3)については、すべて日本語→英語の瞬間的な通訳能力を求める。一般的に暗唱は否定的に評価されることが多いが、“非英語使用環境”において会話を養うには暗唱によって使える表現を増やしつつ、インターラクティブな訓練を行うのがもっとも効果的であるとの考えに立ち、暗誦を重視する。また、日本語を重視するのは、必要な英文を瞬時に検索できるようにするためである。
		スピーキング・スキルⅡ B	1年次後期のリスニングおよびリーディング訓練で使用した素材からいくつかを選び、初級レベルのビジネス英語の口頭応答訓練を行う。学習手法としては、4つの主たる訓練を行う。(1)すでに使用した素材の暗唱、(2)その質疑応答の暗唱、(3)追加の定型的な表現の暗唱および(4)ワークグループ単位でのインターラクティブな使用や評価である。(2)～(3)については、すべて日本語→英語の瞬間的な通訳能力を求める。一般的に暗唱は否定的に評価されることが多いが、“非英語使用環境”において会話を養うには暗唱によって使える表現を増やしつつ、インターラクティブな訓練を行うのがもっとも効果的であるとの考えに立ち、暗誦を重視する。また、日本語を重視するのは、必要な英文を瞬時に検索できるようにするためである。
		英語総合演習ⅠA	本科目は、各週の学習内容について、総合的な演習を行うことにより、知識・技能の定着と応用力を高めることを目的とし、まず英語の進歩を阻んでいる発音や文法でのつまずきを修復するとともに、リスニングとリーディングの表裏一体の関係を理解させる。訓練は、適宜解説を加えながら、その週に実施した各種演習のアチーブメント型テストを、順序などを変えて実施し、学習の努力が直接的に点数に反映され、それがさらに本物の英語力につながるように配慮されている。
		英語総合演習ⅠB	本科目では、英語総合演習ⅠAで身に付けた知識・技能をベースにして、各週の学習内容を総合的に演習し、知識・技能の定着と応用力を高めることを目的とし、チャンク毎に、直読直解できる能力を目指す。訓練は、適宜解説を加えながら、その週に実施した各種演習のアチーブメント型テストを、順序などを変えて実施し、学習の努力が直接的に点数に反映され、それがさらに本物の英語力につながるように配慮する。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基 幹 教 育 科 目	英 語 プ ロ グ ラ ム	英語総合演習ⅡA	本科目では、1年次に身に付けた知識・技能をベースにして、各週の学習内容を総合的に演習することにより、知識・技能の定着と応用力を高めることを目的とし、センテンス単位で内容の60%を素早く理解できることを目指す。訓練は、適宜解説を加えながら、その週に実施した各種演習のアチーブメント型テストを、順序などを変えて実施し、学習の努力が直接的に点数に反映され、それがさらに本物の英語力につながるように配慮する。
		英語総合演習ⅡB	本科目では、総合英語演習ⅡA年で身に付けた知識・技能をベースにして、各週の学習内容を総合的に演習することにより、知識・技能の定着と応用力を高めることを目的とし、センテンス単位で内容の80%を素早く理解できるレベルを目指す。訓練は、適宜解説を加えながら、その週に実施した各種演習のアチーブメント型テストを、順序などを変えて実施し、学習の努力が直接的に点数に反映され、それがさらに本物の英語力につながるように配慮する。
	学 外 プ ロ グ ラ ム	海外語学研修Ⅰ	1年次の夏期休暇に、2週間の日程で英語の研修を実施する。場所は、東南アジアと日本を結ぶ位置にあり、治安的にも比較的安定しているオーストラリアを予定している。この研修の目的は、大学での学習にスタート時からはずみをつけるとともに、前期の学習で習得した英語を実践する場を設けることで、深いモチベーションと、異文化に対する興味を持たせるためである。研修をより充実したものにするため、1年次前期においては、現地で使用するテキストを取り寄せ、学ぶ内容について入念な予習を行う。また、安全の確保のためと、バランスの取れた人格の形成のため、日頃の授業よりグループワークを重視し、本研修においてもグループ単位で行う。
		海外語学研修Ⅱ	2年次の夏期休暇に、4週間の日程で実施する。場所は、ハワイパシフィック大学などの本学協定校を予定している。この研修では、英語力やコミュニケーション力を伸ばすことも重要であるが、異文化体験により文化の多様性に対する理解を促進することにも重きを置く。また、日本をより深く理解し、英語でそれを発信する具体的な場であると自覚させ、積極的な国際交流を実践させる。モチベーションにつながると考えられる。学んだ英語と養ったコミュニケーション能力により人間的な成長を促す実践の機会とする。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要				
(国際交流学部 国際交流学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 教 育 科 目	日 本 学 ブ ロ グ ラ ム 探 究	日本文地理研究	日本列島の自然環境の多様性からはじめて、まず景観の特色、自然の変動にともなう災害を概説する。つぎに日本における資源利用と景観の関係に注目し、その変動を追跡する。さらに近代以後の産業構造や地域構造の変容に焦点を当て、とくに都市システムの変化を考える。くわえて、現代社会における伝統文化や地域文化のあり方を示しながら、今日の日本理解のあり方を考える。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。	
		日本史研究	歴史とは、個々の事件・事象がなぜ起こったのか、そこから人は何を学び、何を後世に語りついで行かなければならないのかを探求することである。本講義では、日本の歴史のうち、主として古代から近世（江戸時代から明治維新前後）までのことがらを取り上げて、その事件・事象の歴史的な意味を講述し、現代の人々がそこから何を学ぶことが出来るかを考察する。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。	
		日本近代史研究	江戸時代末期から明治維新前後、また、それ以降の日本は、近代化に邁進すると同時に、従来の価値と、主として西洋伝来の新しい価値との相克の歴史であった。この150年ほどの歴史は、質においても量においても、たいへんな厚みのあるものとして、現在の我々に問題を投げかけている。本講義では、歴史的な事件をただ振り返るだけでなく、個々の事件・事象における歴史的な意味を講述し、現代の人々がそこから何を学ぶことが出来るかを考察する。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。	
		日本文明研究	文明史の視点で見れば、日本は、それ独自でひとつの文明圏を形成する、世界でも稀に見る特徴を持っている。本講義では、日本文明における政治的、文化的諸特質の中から、特記すべきものを取り上げて講じるとともに、現代日本の政治、文化等に及ぼす影響と、そこから窺い知れる現代人の進むべき道を探求する。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。	
		日本経済研究	日本経済は、戦後の復興から現在に至るまで、高度経済成長、石油危機、円高不況、バブル経済とその崩壊など、大きな変動に直面してきた。また、近年急速に進行しつつある経済のグローバル化や少子高齢化の中で、これまでの成長を支えてきた社会経済システムなどに制度的な疲労が現出し始め、21世紀の日本経済の行く末について閉塞感が生まれ始めている。本講義においては、このような現在の日本経済が直面する問題について、その背景や歴史的経緯なども含めて、総合的かつ経済学的に検討する。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。	

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	日 本 学 プ ロ グ ラ ム 探 究	日本美術史研究	日本の美術史を形成している二つの流れである仏教美術史と近代絵画史の中から、さまざまなトピックを選び、作品の図像と様式について講述する。とりわけ日本で特異な発展形式を見せている諸々の藝術作品について取り上げ、作者が生きた時代の背景など、作品成立までの経緯をも考慮しつつ、制作上の技法に焦点を当てて、日本独特の様式が成立し発展した歩みを考察する。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。
		日本藝能史研究	日本の伝統藝能、能・狂言・文楽・歌舞伎などの中から代表的な名作を厳選し、作品の内容を追って鑑賞するとともに、個々の藝能を形成している諸要素すなわち、原作、役者、語り手、舞台、所作、道具、衣装、楽器等についても講述する。近隣諸国から伝来した諸要素をいかにして取り込み、日本独自の発展を見せた諸要素と調和を取って表演しているかに焦点を当てて考察する。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。
		日本習俗文化研究	日本人の生活様式を形成している習俗文化の諸要素を取り上げて講述する。日本の各地に今も残る伝統行事、習慣、しきたり等、またそこで語り継がれている物語、神話、伝承、説話といったものの中からトピックを選び、現代日本に息づいている古くからの習慣に目を向けるとともに、現代の日本文化にどのように反映しているかにも着目して研究を進める。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。
		日本古典文学研究	上代から江戸幕末頃までの日本の古典文学の中から代表的な作品を取り上げ、内容や解釈にも踏み込んで講述する。日本の古典文学は上代から仮名漢字交じり文を採用した時点で、中国の漢字文化とはつかず離れずの関係を保ちつつ、独自の発展形態を守ってきた。講義では、上代、中古、中世、近世の諸文学における様々な文藝ジャンルを踏まえて作品を講読しながら、日本独自の美意識がいかに反映されているかを考察する。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。
		日本近代文学研究	明治時代以降の日本の近代文学の中から代表的な作品を取り上げ、内容や解釈にも踏み込んで講述する。いわゆる文明開化を経験して、西洋から近代的な文明や個人主義的な価値観が流入して以来、日本人は常に自国のアイデンティティーの危機にさらされていた。近代文学はそれぞれの時代背景を反映しつつ、様々な形で近代的人間像を表現して、これを現代人に伝えている。講義では、作品講読を進めながら、そこから現代の日本人は何を学ぶべきか考察する。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要				
(国際交流学部 国際交流学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 教 育 科 目	日 本 学 プ ロ グ ラ ム 探 究	日本現代文化研究	現代日本を形成しているさまざまな文化事象を取り上げて、社会的に考察する。講義では、日本の社会を考察するための社会的な方法論について、社会システム、都市、家族、労働等の側面からトピックを選んで講述する。現代社会の諸文化がいかにして形成されているか、個々の事例がどのように現代社会と関わりを持っているかに焦点を当てて議論を深める。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。	
		日本マンガ・アニメ研究	今日、世界中に知れ渡った日本固有の文化であるマンガとアニメについて、その日本的な特質を考察する。元来は外来文化として日本にもたらされたコミックスやアニメーション・フィルムが、日本人の手によって、とりわけ第2次世界大戦以降に、他国では類を見ない表現様式に変貌を遂げ、独自の方法的洗練を経て、ついに諸外国でも高く評価される表現方法を獲得した。講義ではこの独自の表現様式の発展に焦点を当てて講述する。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。	
		日本宗教史研究Ⅰ	(神道) 「神道」という名前で近世以降に体系化されるはるか以前から、日本人は「かむながらのみち」を生きるという、古代宗教の神観念とも言うべきものを持って暮らしてきた。いわゆる「古神道」は、文献的な証拠は存在しないまでも、道教的な霊魂観と結びついた氏神信仰、葬送儀礼、神話を形成し、日本人の行動様式を現在に至っても規定している。講義では、これらの諸側面から題材を選び、日本人の精神構造の諸相について考察する。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。	
		日本宗教史研究Ⅱ	(仏教) 6世紀に日本に公伝して以来、仏教は日本人の中心的な宗教思想として、人々の信仰を集めてきた。日本人はどのようにこの外来宗教を自分たちの宗教として取り込んで、受け入れてきたのか。聖徳太子は和の理念をもって仏教を受容し、また空海は密教思想を独自の方式で体系化する中で日本的な感覚をその中に取り込んだ。鎌倉期の諸宗派の展開もまた、それぞれの仕方で仏教を日本化してきた。講義では、こうした日本の仏教思想について題材を選び、講述する。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。	
		関西文化研究	明治期を迎えるまで日本の中心として繁栄したのは関西であった。とりわけ、江戸の隆盛を支えたのは大阪の経済であり、瀬戸内海に臨むその立地には豊かな町人（商人）文化が開花した。その大阪文化の特質を考究し、現在の関西文化に連続する基盤を確かめるとともに、日本人の考え方や生き方の一例として学習する。あわせて、大阪の街に残る町人民家などを実際に見学するとともに、歴史を有する商店などを訪問し今日まで残る家訓などを調査する。	

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	日 本 学 プ ロ グ ラ ム 探 究	比較文化論	この授業では、文化人類学的知識を援用しつつ、日本とアジアを中心に比較を行う。理論的基礎となる文化人類学が欧米で発展したため、関連事象によっては欧米の事例も検討することがある。また、近現代の事象を広く取り扱うことから、授業を通じて歴史についての認識も養成したい。この授業は単なる文化比較に留まらず、社会制度や社会組織の比較論としての意味合いも持つ。受講により、多様かつ広範な視点を養いたい。授業時には関連映像を映写し、授業理解の一助とする。あわせて、重要事項については英語による表現にも言及する。
		専門演習 A	日本学プログラム 探求の「研究」諸科目講義をベースに、さらに深めて講述、調査活動、学生発表、討論等を行う。これらの活動から学生が各々の研究を進め、次年度の卒論研究、卒業論文へと高めていく。あわせて、各人が学習・研究した内容を海外に発信できるように、その梗概や重要な概念・用語を英語で表現する学習を行う。
		専門演習 B	前期の専門演習 A に引き続いて、日本学プログラム 探求の「研究」諸科目講義をベースに、研究活動を行う。あわせて、各人が学習・研究した内容を海外に発信できるように、その梗概や重要な概念・用語を英語で表現する学習を行う。
		卒論研究 A	3 年次における学習・研究活動をさらに進めて、卒業論文を作成するための準備を行う。講義科目や学内・学外での学習・調査等の活動に基づいて、学生各人が卒業論文の主題を見出し、立論できるように指導する。あわせて、各人の研究内容を海外に発信できるように、その梗概や関連事項の説明を英語で表現する学習を行う。
		卒論研究 B	前期の卒論研究 A に引き続いて、学習・研究活動をさらに進め、卒業論文を作成するための準備を行う。講義科目や学内・学外での学習・調査等の活動に基づいて、学生各人が卒業論文の主題を見出し、立論できるように指導する。あわせて、各人の研究内容を海外に発信できるように、その梗概や関連事項の説明を英語で表現する学習を行う。
		卒業論文	学生各人の 4 年間の学びを、各々の関心に基づいて論題を見出し、卒業論文の形にまとめる。立論の妥当性、論点の抽出と整理、論理の一貫性、表現及び形式の適切さ等を指導しながら、論文作成を進めて完成させる。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	英 語 プ ロ グ ラ ム Ⅱ	ボキャブラリーⅢA	1, 2年次に引き続き、ボキャブラリーの増強をはかる。内容は、ビジネスおよび日本文化を中心とした上級レベルの語彙学習である。ボキャブラリーの学習においては、①しっかりと聴き取れる、②文字を読み取って発音できる、という2つの点を重要とする。つづりについては、上の①②を行いつつ、徐々に覚えていく効果的方法を採用する。また、意味については、文脈を利用して意味記憶で覚える方法、文脈と連動させたコロケーション（音声付き）を利用する方法などに加え、ゲーム性のある訓練を行う。さらに、接頭辞、接尾辞、派生語などについても扱うことにより、密接に関連付けられた情報として語彙を習得していく。
		ボキャブラリーⅢB	ボキャブラリーⅢAに引き続き、ボキャブラリーの増強をはかる。内容は、日本文化に関する上級レベルの語彙を中心とする。ボキャブラリーの学習においては、①しっかりと聴き取れる、②文字を読み取って発音できる、という2つの点を重視する。つづりについては、①②を行いつつ、徐々に覚えていく方法が効果的である。また、意味については、文脈を利用して意味記憶で覚える方法、文脈と連動させたコロケーション（音声付き）を利用する方法などに加え、ゲーム性のある訓練を行う。さらに、接頭辞、接尾辞、派生語などについても扱うことにより、密接に関連付けられた情報として語彙を習得していく。
		リーディング・スキルⅢA	リーディング・スキルⅡBに引き続き、黙読でのスキミング（内容把握）およびスキニング（情報読み取り）の訓練を行う。パラグラフ単位で80%の内容をつかめることを目標とする。訓練用の内容把握問題の設問はすべて英語とし、時間において、2度、3度と繰り返し行い、解答に差異が生まれる理由について検討することで、内容にたいする追究力を養う。他方、一度だけの解答しか認めない実践的な訓練も行う。
		リーディング・スキルⅢB	リーディング・スキルⅢAに引き続き、黙読でのスキミング（要旨把握）およびスキニング（情報読み取り）訓練を行う。全文を速読して、60%の内容をつかめることを目標とする。訓練用の内容把握問題の設問はすべて英語とし、時間において、2度、3度と繰り返し行い、解答に差異が生まれる理由について検討することで、内容にたいする追究力を養う。他方、一度だけの解答しか認めない実践的な訓練も行う

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要				
(国際交流学部 国際交流学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 教 育 科 目	英 語 プ ロ グ ラ ム Ⅱ	リーディング・スキルⅢ C	リーディング・スキルⅢBに引き続き、黙読でのスキミング(要旨把握)およびスキニング(情報読み取り)訓練を行う。全文を速読して、80%の内容がつかめることを目標とする。本科目では、批判的な読書についても訓練する。訓練用の内容把握問題の設問は、すべて英語とし、時間において、2度、3度と繰り返し行い、解答に差異が生まれる理由について検討することで、内容にたいする追究力を養う。他方、一度だけの解答しか認めない実践的な訓練も行う。	
		ライティング・スキル	本科目においては、これまでに学習した英文材料を手本として活用しながら、ライティング能力を磨くことを目標とする。この科目へつなげるために必要な布石は、これまでの各科目においてすでに打たれているが、他の技能と同様、ライティングにおいても、良い手本を「真似る」ことが大切であるとの原則に立ち、訓練を行う。日本的感覚による「文法的な英作文」訓練を避ける。質的に優れた英文を書くために、優れた英文を参照・吸収しながら、実際に自力で英文を書き、添削を受けるといった効果的な方法を採用する。	
		スピーキング・スキルⅢ A	2年次後期のリスニングおよびリーディング訓練で使用した素材からいくつかを選び、中級レベルのビジネス英語の口頭応答訓練を行う。学習手法としては、4つの主たる訓練を行う。(1)すでに使用した素材の暗唱、(2)その質疑応答の暗唱、(3)追加の定型的な表現の暗唱および(4)ワークグループ単位でのインターラクティブな使用や評価である。(2)～(3)については、すべて日本語→英語の瞬間的な通訳能力を求める。一般的に暗唱は否定的に評価されることが多いが、“非英語使用環境”において会話を養うには暗唱によって使える表現を増やしつつ、インターラクティブな訓練を行うのがもっとも効果的であるとの考えに立ち、暗誦を重視する。また、日本語を重視するのは、必要な英文を瞬時に検索できるようにするためである。	
		スピーキング・スキルⅢ B	本科目では、スピーキング・スキルⅢAまでにおいて培った英語力をベースにし、日本文化にかんする英語の口頭応答訓練を行う。学習手法としては、4つの主たる訓練を行う。(1)すでに使用した素材の暗唱、(2)その質疑応答の暗唱、(3)追加の定型的な表現の暗唱および(4)ワークグループ単位でのインターラクティブな使用や評価。(2)～(3)については、すべて日本語→英語の瞬間的な通訳能力を求める。一般的に暗唱は否定的に評価されることが多いが、“非英語使用環境”において会話を養うには暗唱によって使える表現を増やしつつ、インターラクティブな訓練を行うのがもっとも効果的であるとの考えに立ち、暗誦を重視する。また、日本語を重視するのは、必要な英文を瞬時に検索できるようにするためである。	

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	英 語 プ ロ グ ラ ム Ⅱ	グローバル・リスニング Ⅲ A	2年次までに培ったリスニング力をベースに、本 科目では、パラグラフ単位での聴き取りが60% 程度できようになることを目指す。学習手順とし ては、まずアメリカ英語をベースにした基礎訓練 を行い、その後イギリス英語、そして、それらが 混ざり合ったもの、さらにアラブ系英語、ヒスパ ニック系英語などを聴いて応用練習を行う。基礎 訓練においては、スロー音声とナチュラルスピー ドの音声の2種類を使い、確実なステップを踏ん で、リピーティングおよびシャドーイングを行う。 スクリプト・語句などは事前にすべて与え、音声 と意味に焦点を絞った訓練を行う。また、初出の 英文に対する英語による設問に答える形式の実践 的な訓練も行う。
		グローバル・リスニング Ⅲ B	グローバル・リスニングⅢ Aで培ったリスニング 力をベースに、本科目では、パラグラフ単位での 聴き取りが80%程度できようになることを目指 す。学習手順としては、まずアメリカ英語をベー スにした基礎訓練を行い、その後イギリス英語、 そして、それらが混ざり合ったもの、さらにアラ ブ系英語、ヒスパニック系英語などを聴いて応用 練習を行う。基礎訓練においては、スロー音声と ナチュラルスピードの音声の2種類を使い、確実 なステップを踏んで、リピーティングおよびシャ ドーイングを行う。スクリプト、語句などは事前 にすべて与え、音声と意味に焦点を絞った訓練を 行う。また、初出の英文に対する英語による設問 に答える形式の実践的な訓練も行う。
		グローバル・リスニング Ⅲ C	グローバル・リスニングⅢ Bで培ったリスニング 力をベースに、本科目では、全パッセージを1回 聴いて60%程度理解できようになることを目指 す。訓練は、さまざまな英語の素材について、ナ チュラルスピードの音声を用意し、シャドーイン グ訓練、「リスニング+並べ替え」や、初出の英文 に対して英語による設問に答える形式の実践的な 訓練も行う。
		グローバル・リスニング Ⅲ D	グローバル・リスニングⅢ Cで培ったリスニング 力をベースに、本科目では、全パッセージを1回 聴いて80%程度理解できようになることを目指 す。訓練は、さまざまな英語の素材について、ナ チュラルスピードの音声を用意し、シャドーイン グ訓練、「リスニング+並べ替え」や内容把握訓練 を行っていく。スクリプト、語句などはすべて与 え、音声と意味に焦点を絞った訓練を行う。また、 初出の英文に対して英語による設問に答える形式 の実践的な訓練も行う。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	英 語 プ ロ グ ラ ム Ⅱ	英語総合演習ⅢA	本科目では、2年次に身に付けた知識・技能をベースにして、各週の学習内容を総合的に演習することにより、知識・技能の定着と応用力を高めることを目的とし、パラグラフ単位で内容の60%を素早く理解できることを目指す。訓練は、適宜解説を加えながら、その週に実施した各種演習のアチーブメント型テストを、順序などを変えて実施し、学習の努力が直接的に点数に反映され、それがさらに本物の英語力につながるように配慮されている。
		英語総合演習ⅢB	本科目では、総合英語演習ⅡBで身に付けた知識・技能をベースにして、各週の学習内容を総合的に演習することにより、知識・技能の定着と応用力を高めることを目的とし、パラグラフ単位で内容の80%を素早く理解できることを目指す。訓練は、適宜解説を加えながら、その週に実施した各種演習のアチーブメント型テストを、順序などを変えて実施し、学習の努力が直接的に点数に反映され、それがさらに本物の英語力につながるように配慮されている。
		総合コミュニケーションA	本科目では、2年次までに学んだ素材を任意で講師が選び、それにたいして復習を行ったあと、グループを作り、ディスカッションを行う。特定のグループを指名して、他の学生の前でディスカッションを行うといった訓練も行う。素材は、主にすでに学んだものを使用するが、インタラクティブな会話の中で、これまでに蓄積された情報の間で創発的なプロセスが働き、定型的に訓練した英文以外の英文を独自に生成して使うことができるようになることを目指す。
		総合コミュニケーションB	前期総合コミュニケーションAに引き続き、総合的なコミュニケーション能力の高度化を図る。素材としては、3年次に使ったものから高度なものを選び、それにたいして復習を行ったあと、グループを作り、ディスカッションを行う。特定グループを指名して、他の学生の前でディスカッションを行うといった訓練も行う。素材は、主にすでに学んだものを使用するが、インタラクティブな会話の中で、これまでに蓄積された情報の間で創発的なプロセスが働き、定型的に訓練した英文以外の英文を独自に生成して使うことができるようになることを目指す。
		プレゼンテーション演習A	本科目は、プレゼンテーション演習Bと対をなしている。卒業論文の概要を英語によりプレゼンテーションさせる。また、他の者のプレゼンテーション素材をも使用して、グループ単位による口頭発表および質疑応答の訓練を行う。総合的な英語力による発信とコミュニケーション能力を養う。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要				
(国際交流学部 国際交流学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 教 育 科 目	英 語 プ ロ グ ラ ム Ⅱ	プレゼンテーション演習 B	本科目では、プレゼンテーション演習Aにおける訓練を補充しつつ、順次、訓練した内容について、実際にクラス全員の前でプレゼンすることにより、実践的なプレゼンテーションの技術を磨く。発表内容に加え、発表の方法や態度などにも留意し、より効果的なプレゼンテーションを目指す。	
		プレゼンテーション演習 C	本科目は、プレゼンテーション演習Dと対をなしており、前期プレゼンテーション演習AおよびBで学んだ技術をベースに、学生各々の卒業論文の骨子を、まず日本語で書き、それを翻訳する形で英語のプレゼンテーション原稿を作成する。その場合、グループ作業を重視し、互いに内容や英語を批判しブラッシュアップする。個々の作業の進行状況は、中間発表会を開催し、全員に公開する。	
		プレゼンテーション演習 D	本科目では、前期プレゼンテーション演習Cの作業を補充しつつ、完成した原稿を順次クラス全員の前で発表し、質疑応答を行う。	
		英米文学Ⅰ	(概論・講読) 本講義では、英米文学の代表的な作品を選読する。とくに、それぞれの時代を代表する作品を取り上げ、当該社会の特質を探る。また、英米文化を代表するような詩句や名句を取り出し、その意味を検討し、暗誦する。	
		英米文学Ⅱ	(文学史・講読) 英米文学の歴史を概観する。文学史上の時代区分について知識を深めるとともに、英語表現の時代的変遷や広がりや豊かさを学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	人 材 交 流 マ ネ ジ メ ン ト プ ロ グ ラ ム	異文化理解基礎	自己の考え方や価値観を形成していく途上で、人は必ず他者の考え方や価値観との対決を迫られる。異文化理解を深め、国際交流を促進するためには、まず準備段階として、自己と他者の「ものの見方」を深く知って、その上でさらに自己に立ち帰って考える必要がある。本講義では、世界の様々な民族の思考方式と行動様式について講述し、それらの間にある差異と共通点について学んだ上で、主として倫理的な諸問題に題材をとり、個々人の思考の差異が生じてくる要因について考察する。
		心理学基礎	心理学理論に基づく人間理解とその方法について、日常生活の中の身近な事象や各種の時事問題をトピックスとして取り上げ科学的にアプローチする。知覚、記憶、学習、言語、発達等の基礎心理学領域に関する心と行動のしくみを概説し、身の回りの問題を心理学的に考察する。人間の心のはたらきに対する理解や関心を深めると同時に、観察に基づく心理学の方法論を通じて科学的探求の基本的姿勢を獲得させることを目的とする。
		哲学	哲学の方法と根本問題を、身近な実例を用いた論理の演習と、代表的哲学的著作の講読を通じて学び、「ものごとを考えること」を実践する。第1に、考える方法、すなわち論理構築の仕方と、その実践を練習問題を通じて学ぶ。第2に、プラトンの著作『国家』を読んで具体的な哲学的・論理的思考の場を体験し、同時に約2400年の長きにわたって人類の思想の歴史を形成してきた哲学の根本問題について学ぶ。第3に、プラトンの思想が後の哲学史に及ぼした影響を中心に、西洋哲学史の流れを概観する。
		文化人類学	人類が形成してきた文化について、世界の様々な例を示しながら、その多様性と共通性を理解する。環境への適応戦略にはじまり、社会組織、宗教の役割に言及し、さらにコロニアリズムと伝統社会との関係、エスニシティの役割など、近現代の変動を検討する。これらを通じて、文化がどのように形成され、変容しているか、さらには現代の世界における国家、民族の役割を改めて理解し、「異文化」の捉え方、理解の仕方について考察する。

授 業 科 目 の 概 要				
(国際交流学部 国際交流学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専 門 教 育 科 目	人 材 交 流 マ ネ ジ メ ン ト プ ロ グ ラ ム	人間関係論	自己と他者との関わりによって生じる社会的行動に焦点を当て、社会心理学領域の基礎的な概念や理論について講義する。様々な人間関係を形成する心的プロセスや、集団行動、社会的現象について解説し、我々が他者や社会をどのように理解しているのか、またお互いにどのように影響しあっているのかという問いを探求していく。授業では、テーマに関する心理学的実験・調査を活用し、体験的学習を通じて学生の理解を深める。	
		集団心理学	人間は集団を形成して生きている。社会の成員として他者と関わり、自己が属する集団やまた他の集団とも相互に影響を及ぼし合って生活をしている。本講義では、個人と集団との相互作用をもたらす人間の心理と行動の特徴に焦点を当てて、集団における対人関係やコミュニケーションの特質を、社会心理学の観点から講述し、より良い集団形成と個人の適応に向けた取り組みを、いかにして可能にするか考察する。	
		対人コミュニケーション論	心のしくみや人間関係に関する基礎的学習を踏まえ、対人コミュニケーションの諸理論について検討していく。主に、人間の心的活動を情報処理過程として捉える認知心理学的観点から言語・非言語コミュニケーションについて詳説し、対人場面で生じる種々の認知のはたらきについて探求する。授業では学生の主体性や自由な発想を重んじ、各自のリサーチ・クエスチョンを発展させて専門性や実践的知識につなげることを目指す。	
		異文化コミュニケーション論 I	現在の国際社会は、グローバル化が叫ばれている反面、個々の国家や民族といったローカルの特質を全面に主張する動きも活発である。欧米文化一般について概観した後、人間の概念形成のあり方に触れ、異文化理解や文化の普遍性と特殊性などについて、具体例を用いながら考察することにより、文化についての各人の意識や理解を深める。	
		異文化コミュニケーション論 II	日本とアジア諸国との関わりは、地理的な近さ故に必ずしも親和的な側面だけでなく、様々な相克をもともなっている。国際社会のグローバル化が叫ばれる今日において、異なる文化圏の者同士がいかにして個々の民族的特質を尊重しつつ、交流を深めていけるかが喫緊の課題である。本講義では、日本とアジア諸国との関わりについて、いくつかの実例を挙げながら、地理的、歴史的な要因を考慮しつつ、異文化交流の現状と課題を講じる。	

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	人材交流マネジメントプログラム	ホスピタリティー論	日本が世界から高い評価を受けている「おもてなし」の精神は、いかにして養成されているのか。ホテルを始めとするホスピタリティー組織において、顧客に対する製品の提供は、最前線のサービス提供者の「人間的行為」に依存することが多いため、顧客志向のサービス提供者、ならびにそれを支援する優れた従業員を養成することが顧客満足獲得の鍵となる。本講義は、受講者が実際にホスピタリティー組織における教育プログラムを経験することによって、人材開発の方法論を学習することを目的とする。
	国 際 日 本 プ ロ グ ラ ム	国際関係論	第2次世界大戦後を中心に、日本を取り巻く国際関係事象（人間およびその集団・組織の間の接触と相互作用に見られる協力、競争、紛争など）のさまざまな出来事をひろく取り上げ、今日の世界が諸国家や諸民族、さらには諸文化の複雑で多様な関係から成り立っていることの理解を促す。狭い意味での政治や経済の事象のみならず、戦争や紛争(安全保障、、領土、平和)、宗教対立、国際テロリズム、人口(労働力)移動、交通、国際結婚、文化交流、NGO活動、地域統合などなど身近な問題もとりあげる。
		国際経済学	近年、地球規模で急速に進行している経済のグローバル化に伴い、世界的に経済の環境やシステムが大きく変化してきている。本講義では、このようなグローバル化の進行に伴って発生してきた様々な国際経済問題について、自由貿易体制の成立・発展などの歴史的経緯と国際経済学の分析ツールを用いた理論的な検討結果とを関連させながら解説を行う。また、WTO (GATT) や IMF に代表される戦後の国際経済体制の確立とその問題点、さらに近年急速に増加傾向にある FTA などの地域経済統合についても、経済学的に検討する。
		アジア海域交流史	日本は四方を海に囲まれた島国であり、基本的には海域を舞台とした諸民族や諸国家との交流によって発展してきたといえる。実際、歴史的に見ても、広く東アジア一帯の交流は陸上よりも海上のほうが盛んであったといえる。そうした海域交流を軸として日本社会・文化をとらえ、その多様性を学ぶ。つまり、アジア海域を中心として、そこにみられる交流の歴史を学び、日本の伝統文化の形成過程にいかなる影響を持ったかを考察する。
		多文化共生論	現代社会はすでに多文化状況の下にある。そのことは現在、共通の認識となりつつあるが、異文化的な他者との共生は真に可能だろうか。この授業では、今日、国策として多文化主義(マルチカルチュラリズム)を推進するオーストラリアやカナダの事例や、ヨーロッパ・東南アジア諸国の事例を取り上げ、歴史的かつ社会的な分析を行う。多文化主義は、必ずしも一枚岩的な考え方ではなく、批判もあるため、その批判論についても理論的に検討したい。また、グローバリゼーションに関するいくつかの議論も紹介し、多面的に多文化共生のあり方について考察する。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 教 育 科 目	国 際 日 本 プ ロ グ ラ ム	日本近代外交史	日本が世界史の舞台に本格的に登場するのは、明治維新以降のことである。日本と様々な諸国・諸地域との外交史を学ぶことにより、日本がどのようにして外部世界に発展していったのかを整理する。とりわけ、資源の少ない海洋国家である日本が外との関係をどのように展開したかや、日本の伝統的文化が外交にどのように反映したかを、世界的視野から相対的に鳥瞰し、そこに日本外交の特徴を見る。その上で、グローバル化時代を迎えた多今日の外交所あり方もあわせて論じ、討論を試みる。
		日本・欧米関係論	日本はアジアに位置しているが、その近代以降の歴史を見る限り、あきらかに欧米の影響をも大きく受けている。イギリスやドイツをはじめとする欧州およびアメリカとの関係史を整理し、日本の国や社会のあり様とどのように関係したかを学ぶ。また、その関係自身がどのような特徴を有するかも検討する。加えて、欧米における日本との関係の捉え方を探り、そこから日本そのものを照射してみる。その上で、今後の関係のあり方を、議論する。
		日本・アジア関係論	日本はアジア諸国の一員であるが、アジア大陸からも孤立した位置にあり、独自の文明を築いた歴史を持っている。そのためもあり、アジアの他の諸国との関係も大層複雑である。ここでは、まず日本に軸足を置いてアジア全体との関係を概観した上で、とくに東南アジアおよび中国の日本との関係の特質を考えて見る。また、昨今あちこちで提唱されている「東アジア共同体」などの地域統合構想についても触れ、日本・アジア関係の将来を展望する。
		アジア経済事情	第二次世界大戦後、アジア地域において発生した経済的事象の中から、①日本を含む東アジア諸国の経済発展、②アジアにおける地域的な経済連携の進展、③アジア通貨危機の発生とその収束、という3つの大きなテーマを取り上げ、それらについて世界経済の視点から分析と解説を行う。その上で、グローバル経済が進行する現代の世界において、アジア地域の国々が果たすべき役割について検討し、さらにアジア経済の近未来について展望する。
		マイノリティ研究	この授業では、主に「マイノリティ(少数派)」として個々の社会に息づく存在について検討する。日本を対象とする際には、国内の種々の民族的コミュニティの形成や歴史・現状、ならびに近年の外国人労働者の状況や、病者・障がい者を含んだ社会的弱者のありさまを分析の対象とする。国外ではアジアや欧米の少数民族や先住民、難民などのありさまや、「マイノリティとしての日本人」の事例も分析する。いずれも文化相対主義が分析のためのキーワードとなるが、マイノリティが社会的な存在として等しく尊重される社会の形成について考えられることが、ひとつの到達目標である。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要				
(国際交流学部 国際交流学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門 教育科目	国際日本プログラム 国際交流演習 (英語プレゼンテーション演習)	日本がこれからの国際交流を進めるためには、日本と諸外国との関係を踏まえた上で、外国語を用いて、日本の文化、歴史、地理、習俗等を、正しく伝えていくことが不可欠である。本演習では、日本が諸外国に発信していくべき事柄を吟味し、英語によって表現するプレゼンテーション練習を行う。内容が正しく伝わるよう、適切な英語表現を選択し、英語による発信にふさわしい構成を考えて英文を作成する。また、プレゼンテーションの内容をめぐって生じる質疑応答についても、これにふさわしい英語表現を練習する。		
	関連 教育科目	創造力開発Ⅰ	(商品・サービスの企画・開発) 日本は「ものづくり」の国として有名である。毎年多様な商品が生まれている。その中からよりユニーク性を有するものを取り上げ、その企画段階から完成までの過程を追いかける。技術的側面よりも、企画やアイデアの社会文化的背景、開発過程における個人や組織の働き、商品を受け入れた消費者などを分析し、日本人のものの考え方や生き方を訪ねる。その商品の海外での評価も調査する。	
		創造力開発Ⅱ	(建築・美術・ファッション・デザイン・ショー) 日本にはきわめて優れた美術作品や建築物が多い。その美しさにも日本文化の特徴が多く秘められている。その中でも、一般庶民の生活文化と共通するものを追い求める作業を行なう。具体的には、建築や美術における材料、空間(デザイン)、構造、色彩などを分析する。より具体的には、建築物では、城郭や寺院などのほか一般の民家も対象とする。また、美術では、絵画はもとより、彫刻や家具などもとりあげる。実際に現物を見に行くことも授業の一環とする。	
創造力開発Ⅲ		(町おこし) 近年各地で「町おこし」が盛んである。近隣の町の町おこしの成功例を取り上げ、その過程を学習する。その上で、なぜ成功したのかを分析し、ものの考え方やアイデアの特質を探し出す。その町の住民への聴き取りやアンケート調査などを実施し、町おこしに対する考えや意識を調べる。その際、伝統文化や慣習の保存や継承という視点からも考察を加え、現代に生きる日本文化の深層に触れる。		

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
関 連 教 育 科 目	生 き 方 学 習 プ ロ グ ラ ム	人物研究Ⅰ (産業・ものづくり) 日本の歴史の中で国家レベルで重要な役割を果たした人物を取り上げ、その生き方やものの考えを学ぶ。とくに、明治以降の近現代史の中で、「世界の中の日本」ないしは「外国と日本」について深い思索をめぐらした人物、ないしは日本の歩みに大きな影響を与えた人物を取り上げる。できれば、その人物ゆかりの地を訪ねる。	
		人物研究Ⅱ (政治・経済) 日本の経済政策を支え、東アジアの経済発展に寄与した人物を取り上げて講述する。戦後の高度経済成長は、政・官・民が一体となって突き進んだ結果であるが、その立役者の一人下村治は、後に「下村理論」と呼ばれる独自の理論を構築した。また、赤松要は、東アジア諸国の経済発展を理論的に説明するために、実証研究を基に「雁行型発展論」という独自の理論を構築した。授業では、それぞれの経済理論の構築過程を通して、彼等の経済思想と人となりについて学習し、さらにそれらの理論的成果について現在の視点から考察し、再評価を行う。	
		人物研究Ⅲ (思想) スポーツや芸術の分野で大きな影響を与えた人物を取り上げる。彼／彼女の突出した才能を確認するとともに、個々のプレーや作品にどのような生き方やものの考え方が反映されているかを考究する。とりわけ、日々のたゆまぬ努力の裏にある精神力がどこから生まれてくるのかに留意する。	

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
関 連 教 育 科 目	近 隣 ア ジ ア 地 域 研 究 プ ロ グ ラム	中国研究	中国は今日その経済的躍進に世界中から注目が集まっている。まず、その自然、民族、歴史、政治、経済、社会（人口、教育）、文化などの概要を学ぶとともに、現代中国が抱える問題や課題を考究する。また、一衣帯水といわれる日本との関係について、理解を深める。
		台湾研究	日本統治時代を経験している台湾は、中華民国政府による実効支配が行なわれている。地政学上の理由もあり、古い時代から東アジアにおける交易の重要な役割を担ってきたその歴史を学ぶとともに、現代における国際関係上の位置について考究する。また、豊かな自然や文化についても概説し、人々の生活についても学ぶ。
		韓国研究	日本に最も近い隣国である韓国（大韓民国）について学ぶ。とくに、古い時代からの日本との関係史について理解を深め、将来への友好関係を展望する。ここ数年の経済発展にも留意するが、文化や社会構造を日本との比較の視点から考究する。とりわけ、日本と共通する儒教文化などが現在社会の中でどのように生きているかも観察する。また、音楽をはじめとする大衆文化の日・韓交流の現状などにも言及する。
		タイ研究 I	東南アジア諸国の中で唯一 600 年以上にわたって日本と友好関係にあるタイ国とはいかなる国なのかを、歴史、自然、民族、言語、産業などについて概観する。その上で、年間 120 万人もの日本人観光客を惹きつける理由を考究する。おそらくは、同じアジアに位置しながら、まったく異なった社会構造や文化を有している点が、日本人にとって魅力的なのであろうが、そのことを具体的に学習する。タイには、数多くの日系企業があり、数万人の日本人が滞在し経済活動などに従事していることでも有名であるが、日本人社会についても考察する。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
関 連 教 育 科 目	近 隣 ア ジ ア 地 域 研 究 プ ロ グ ラ ム	タイ研究Ⅱ	タイも東南アジアの他の諸国と同じように多民族社会である。北部や東北部、さらには南部には現在でも様々な民族が住んでいる。彼らの慣習や信仰(宗教)はいわゆるタイ文化とは異なっている。タイが国民国家を形成する過程では、アユッタヤーやバンコクを中心とする中部タイの文化と周辺文化の交流や確執が存在した。たとえば、同じ仏教でも民族の間で微妙な違いを見せる。そうした文化の多様性を確認しながら、タイという国家の特質を考究する。
		ベトナム研究	東南アジア大陸部東端に位置するベトナムは社会主義を標榜する国であるが、他の東南アジアと異なり、歴史的に中国との関係が深いとされている。民族、自然などを概説した上で、独立闘争史や外交史を把握した上で、現在のドイモイ時代に至る国づくりの歩みを学習する。また、宗教や農村社会構造などについても、その特徴を追う。また、この国の基本を制しているといわれる南北問題を俎上に挙げ、議論したい。ベトナム語の基礎についても概説する。
		中国語A	中国研究等を通して中国語に関心を持った学生が楽しく無理なく中国語の基礎を習得することを目指す。発音の基礎からはじめ、初級中国語の教程において学ぶべき必要最低限の文法・語彙を習得する。中国の漢字(簡体字)・発音表記(ピンイン)に習熟し、発音が正確にでき、基本的な文法事項を理解し運用できる能力を養う。
		中国語B	原則として、中国語Aの既習者を対象とする(中国語の発音符号(ピンイン)を学習済みとして授業を進める)。初級中国語の教程において学ぶべき文法・語彙を習得する。中国の漢字(簡体字)・発音表記(ピンイン)に習熟し、発音が正確にでき、基本的な文法事項を理解し運用できる能力を養う。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
関 連 教 育 科 目	近 隣 ア ジ ア 地 域 研 究 プ ロ グ ラ ム	ハングルA	韓国研究等を通してハングルに関心を持った学生が無理なくハングルの基礎を習得することを目指す。ハングルを音から習得し、基本的な挨拶、簡単な会話をマスターすることを目指す。直接会話を通して、ハングルをリスニング・スピーキング・ライティング・リーディング全てにおいてバランス良く向上させる。
		ハングルB	原則として、ハングルAの既習者を対象とする。質問形式とロールプレイを活用して会話を繰り返すことにより、教員が一方的に話す講義形式ではなく、会話の基本である『聞く』と『話す』能力を重点的に訓練し、学習言語で考え・自然な対話ができることを可能にする。
		アジア文化研究	アジアに居住する多様な民族の文化をいくつかの角度から検討し、その多様性と共通性、さらには近年におけるその変容を考える。まず居住環境と資源利用を概観し、つづいて言語や宗教、エスニシティとその形成過程、さらにそれらの近代国家形成との関係を検討する。くわえてグローバル化にともなう人や情報の流動にともなう、さまざまな文化交流に言及し、アジア文化の相互浸透の意義について考える。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
関 連 教 育 科 目	情 報 技 術 プ ロ グ ラ ム	情報処理基礎演習 A	実習を通してコンピュータの基本操作と活用方法を習得するとともに、情報倫理として携帯電話も含めた情報通信機器とインターネット利用上の注意事項を学ぶ。具体的には、＜インターネットを利用した情報収集とインターネット利用上の注意事項＞、＜レポートの作成を通じた文書作成ソフトウェアの利用方法＞、＜発表用資料の作成を通じた発表支援ソフトウェアの利用方法＞を対象とする。授業は実習を中心とし、必要に応じて講義を行う。
		情報処理基礎演習 B	実習を通してコンピュータの活用方法を学ぶ。具体的には、表計算ソフトウェアによる＜データの処理方法＞、＜データや処理結果の表示方法＞、＜簡易データベースとしての活用方法＞を学ぶ。また、＜文書作成ソフトウェア、発表支援ソフトウェアとの連携方法＞も学ぶ。授業は実習を中心とし、必要に応じて講義を行う。
		情報処理演習 A	コンピュータの基本操作と活用方法を習得するとともに、情報倫理として携帯電話も含めた情報通信機器とインターネット利用上の注意事項を学ぶ。具体的には、インターネットを利用した情報収集の方法、文書作成ソフトウェアを利用したレポート作成の方法、表計算ソフトウェアによるデータの処理方法や可視化の方法と簡易データベースとしての活用方法、ソフトウェア間のデータ共有による作業の効率化の方法を習得する。
		情報処理演習 B	前期の教育の内容の総括をするとともに、および発表支援ソフトウェアによる口頭発表・プレゼンテーションへの活用方法、ホームページ作製技術について学ぶ。

様式第2号 (その3の1)

授 業 科 目 の 概 要			
(国際交流学部 国際交流学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
関 連 教 育 科 目	キャリア・デザイン	「学び方」「働き方」「生き方」の探求をテーマとして参加型授業を行い、大学における学びを基点とした、長期的で広い視野からのキャリア発達を促すことを目的とする。学生が自ら社会との関わり方や社会における役割を発見し、生涯を通じたキャリア形成の基礎を構築することを目指し、実践的指導を行う。学生同士の討論や研究発表などの課題を通じて、社会人として必要な分析力、思考力、表現力、問題解決能力を養う。	
	キャリア・プランニング	キャリア・デザインをさらに発展させて、自らの「進路」や「社会とのかかわり方」を考えることを目的とする。自分の将来像を思い描くだけでなく、適性検査をも取り入れ、自分を客観的に見つめなおし、さまざまな職種を検討して自らの適性と照らし合わせる。また業界の仕組みを調べることによって、目指すべき職業と会社の選択を考え、適切な進路設計を行う。自分の人生設計や進路選択を自ら考え、目標設定に必要な素養の育成を目指す。	
	健康スポーツ演習Ⅰ	高齢化の現代社会にあつて、国民の課題となっている心身の健康の保持・増進を目的として、体育種目を取り入れ、競技に関連する講義を実施し、技術面、戦術面などについて、実技を通して自ら学び、スポーツへの理解を深め、生涯にわたってスポーツを楽しむ態度を育成することを目指す。	
	健康スポーツ演習Ⅱ	高齢化の現代社会にあつて、国民の課題となっている心身の健康の保持・増進を目的として、体育種目を取り入れ、競技に関連する講義を実施し、技術面、戦術面などについて、実技を通して自ら学び、スポーツへの理解を深め、生涯にわたってスポーツを楽しむ態度を育成することを目指す。 Ⅰとは異なる種目を内容とする予定。	